

昭和40年度

地力保全基本調査成績

〔標津地域一標津町〕

北海道立中央農業試験場

64

序

現状における土地生産力は土壌の諸種の阻害要因によつて十分にその地力を登揚できない場合が少なくないのみならず一方では剥脱要因もあつてその地力は消耗低下しつつある。従つてこれら阻害要因を排除して合理的かつ適切な地力保全の対策を推進し、もつて当面の農業構造改善の基盤整備に資するための昭和34年より農林省農政局の助成をえて基本的土壌調査分類を実施している。

本調査成績書は昭和40年度に行なつた15市町村をとりまとめたもので、こゝにこれを公表し営農安定の資に供する次第である。

現地調査の遂行に際して御協力を得た関係市町村、農業協同組合ならびに農業改良普及所の関係各位に対して、深く感謝の意を表する。

昭和41年3月

北海道立中央農業試験場
三島京治

調査並びに取まとめ方法

本調査は、凡そ10.0ha以上の集団になつている農耕地および付帯地を調査対象とし、調査および取まとめに当つては、夫々下記の資料に基づいた。

1. 土壌断面調査および現地での営農状況は地力保全対策資料第6号(昭和36年9月、農林省振興局農産課)によつた。
2. 土壌統および区の設定並びに土壌生産力可能性等級基準は、地力保全対策資料第12号(昭和40年3月、農林省農政局農産課)及び水田土壌統設定第1次案(昭和38年12月、農技研化学部土壌第3科)によつた。

土壌統および土壌区の設定に当つては、北海道農業試験場農芸化学部土壌第1研究室の土性図を参照した。

調査職員氏名

化学部	部長	長谷部	俊雄
”	土壤改良科 科長	後藤	計二
”	” 第1係長	小林	荘司
”	” 研究職員	高尾	欽彌
”	”	菊地	晃二
”	”	水元	秀彰

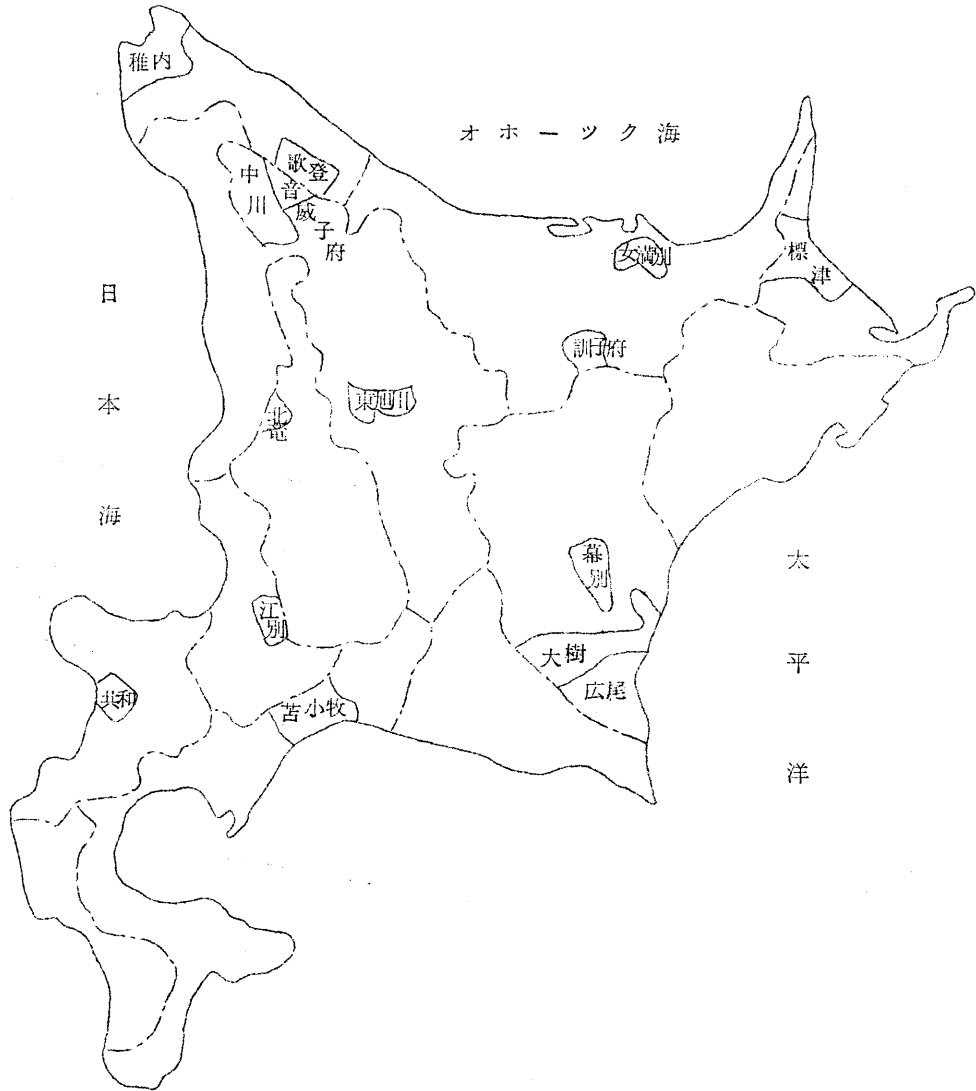
主に土壌分析を担当した職員

化学部	土壤改良科	研究職員	谷口	未吉
”	”	”	小野	清子

1. 調査地域一覽

調査地域名	該 当	農 地 面 積 (調 査 対 象 面 積)		既 調 査 面 積		本 年 度 調 査 面 積	
	郡 市 町 村 名	水 田	畑	水 田	畑	水 田	畑
共 和	岩内郡共和村	2,372.0	3,176.0	2,372.0	2,000.0	0	1,176.0
石狩川下流	江別市	3,456.0	4,767.0	0	3,000.0	3,456.0	1,767.0
空知郡北部	雨竜郡北竜町	1,891.0	897.0	1,800.0	0	91.0	897.0
上川中央	旭川市(東旭川町)	4,524.0	1,462.0	4,000.0	0	524.0	1,462.0
上川北部	中川郡音威子府村	64.0	1,590.0	0	1,000.0	64.0	590.0
上川北部	中川郡中川町	81.0	3,883.0	0	1,000.0	81.0	2,883.0
稚 内	稚 内 市	0	2,736.0	0	1,000.0	0	1,736.0
頓 別	枝幸郡歌登町	0	2,987.0	0	1,000.0	0	1,987.0
網走湖畔	網走郡女満別町	923.7	6,420.0	0	4,200.0	923.7	2,220.0
北 見	常呂郡訓子府町	550.0	5,141.0	0	4,000.0	550.0	1,141.0
標 津	標津郡標津町	0	2,740.0	0	1,000.0	0	1,740.0
日高山脈東山麓	広尾郡大樹町	0	10,000.0	0	5,000.0	0	5,000.0
日高山脈東山麓	広尾郡広尾町	0	4,850.0	0	2,000.0	0	2,850.0
十勝中部	中川郡幕別町	328.0	14,900.0	0	5,000.0	328.0	9,900.0
樽前山南山麓	苫小牧市	435	2,796.7	0	0	435	2,796.7
合 計		14,233.2	68,345.7	8,172.0	30,200.0	6,061.2	38,145.7

調査地区位置図



標津地域標津地区

1 地区の概況

1) 位置及び調査面積

(1) 位置 標津郡標津町

(2) 調査面積 (ha)

郡市町村名	畑 総 面 積				調 査 対 象 面 積				過 年 度 調 査 面 積			
	水田	普通畑	樹園地	計	水田	普通畑	樹園地	計	水田	普通畑	樹園地	計
標津郡標津町	0	2,740	0	2,740	0	2,740	0	2,740	0	1,000	0	1,000

本年度調査面積				次年度以降調査計画面積				備 考
水田	普通畑	樹園地	計	水田	普通畑	樹園地	計	完 了
0	1,740	0	1,740	0	0	0	0	

2) 気 象

海岸からの距離が近く、この間海洋の影響を防ぐ地形的要因がないため海洋の影響を強く受け、夏季の気温は低く、冬季の気温が少々高い傾向にある。

春の農耕開始期における気温の上昇が緩慢であり、加えて冬期積雪少く、気温が低いいため土壌が凍結し、春季の農耕開始を更に遅延せしめている。

次に霧の襲来がある。海洋上にある所謂親潮前線によつて発生する濃霧が、盛夏の頃多く襲来して、日照不足、温度の下降と、それに加えて湿度の上昇を来し、農作物の生育に悪影響を及ぼしている。

標津気候観測所の観測成績は次の通りである。(霧日数は根室及び内陸の春別を載せたが、これの中間程度と思われる。)

(1928～1950の平均)

項 目		月 別	4	5	6	7	8	9	10	11
気 温 (℃)	平 均		3.2	8.2	11.9	16.3	19.5	16.1	10.1	3.6
	最高平均		7.9	13.5	16.4	20.6	23.7	20.6	15.7	8.4
	最低平均		-1.5	2.9	7.3	11.9	15.3	11.5	4.4	-1.3
降水量 (mm)	平 均		56.9	75.1	84.8	82.8	108.3	146.0	94.0	74.5
	1日最多量		95.0	79.0	160.0	94.6	129.0	165.2	102.0	160.0
霧日数 (根室)			9.0	13.5	19.0	21.0	19.7	8.4	3.0	1.8
" (春別)			-	-	6.0	7.0	9.0	7.3	2.7	-

晩霜 5月19日 初霜 10月7日

3) 土地条件

(1) 地形

標高40~130mの略々平坦又は緩傾斜を有する。

(2) 地質

主として火山噴出物からなっている。

(3) 侵蝕状況

土壌の保水性が高いため風蝕を受けることはないが、緩傾斜地では融雪時等に水蝕を受け、細流侵蝕が見られる。

(4) 交通

海岸線に沿って道道を通じ、農道も概ね設置されているので、交通は左程不便でない。しかし当地方は砂利に不足しているため、農道の砂利敷が不十分で、融雪季、降雨時には悪路となつて不便を来している。

4) 土地利用及び営農状況

本町全体の状況は次の通りである。

a) 経営面積(1戸当平均ha)

総面積	田	普通畑	樹園地	その他
24.3	0	7.6	0	16.7

b) 作付面積(1戸当り平均ha)

作物面積	大麦	馬鈴薯	ビート	えん麦	牧草	その他の飼料作物
	0.2	1.0	0.2	0.8	5.6	1.0

c) 家畜の種類及び頭数

	馬	乳牛		豚	山羊	綿羊	鶏
		成牛	育成牛				
飼育戸数	400	400	400	40		150	200
飼育頭数	580	1,600	1,000	80		230	9,000
1戸当り平均飼育頭数	1.5	4.0	2.5	2		1.5	4.5

d) 農機具及び施設(400戸の総数)

種類	数量	種類	数量
双輪ブラウ	10	動力噴霧機	11
再墾ブラウ	300	畜力 "	6
カルチベーター(三畦)	300	いも掘機	95
肥料播機	60	トラクタ	10
モーター	107	畜舎	400
ヘーレレーキ	112	鶏舎	400
農用発動機	33	尿溜	170
脱穀機	24	サイロ	290
カッタ	36		

e) 労働の関係(1戸当り人数)

家族人数	労力換算	季節雇	臨時雇
4.7	2.0	0	33.7

当地域は農期間の気温が低く、加えて海霧の襲来が夏季特に多い劣悪な気候条件を反映して主畜経営が営まれている。昭和30年頃から集約酪農振興が推進され、年々牛乳の生産量は増加して来ているが、乳牛を主体とした主畜経営は膨大な投下資本を要し、かつ資金回転の遅いことは衆目の知るところである。近年他産業との所得較差が逐年増大し、当地域の経営も時代に即応した体質改善を迫られているが、経済的問題が最も大きな隘路となつている。中には経済的に不安定な中、小規模経営の農家も存在し、これらの経営を急速に拡大、強化を図つて安定規模の確立を期さなければならない問題もある。

今後農業構造改善事業の推進により、主畜経営の発展と、経営規模の確立を期すべく努力している。

2 土壤類型区分及び説明

1) 土壤統一覧及び土壤区一覧

(1) 土壤統一覧

土壤統名	色層序	腐植層序	礫、砂礫層を混在する砂層	酸化沈積物	土性		母材堆積式
					表土	次層	
コウロシ	YR/YR	表層多腐植層	あり	なし	粘質	壤質	非固結火成岩 (風積)
古多糠	YR/YR	"	"	"	壤質	壤質	"
川北	YR/YR	"	"	"	壤質	壤質	"
糸櫛別	YR/YR	全層多腐植層	"	あり	壤質	粘質	"
茶志骨	YR/YR	表層多腐植層	"	"	粘質	粘質	"
崎無異	YR/YR	"	"	なし	壤質	壤質	非固結火成岩 (風積)
忠類	YR/YR	"	"	"	"	"	非固水成岩 (水積)
伊茶仁	YR/YR	"	なし	あり	粘質	壤質	"
東茶志骨	YR/YR	-	"	-	-	-	ヨシ、スゲ (集積)
標津原野	YR/YR	-	"	-	-	-	スゲ、ヨシ、ミスゴケ (集積)
ウラツブ	YR/Y	表層腐植層	あり	なし	壤質	壤質	非固結水成岩 (水積)

(2) 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式	耕地面積(ha)	備考
コウロシ - コウロシ	III n II f e	131	農牧適地... 1,384 (ha)
古多糠 - 古多糠	II g w f i	571	" ... 6,055
川北 - 川北 - 1	III f n e II d w	800	" ... 8,477
川北 - 川北 - 2	III f n e II d w s	370	" ... 3,922
糸櫛別 - 糸櫛別	III w f II g n i e	272	" ... 2,884
茶志骨 - 茶志骨	III w f II g p n i s e	33	" ... 346
崎無異 - 崎無異	III f n II p w i e	22	" ... 231
忠類 - 忠類	II d w f e	22	" ... 231
伊茶仁 - 伊茶仁	III w e II p n	27	" ... 288

土 壤 区 名	簡 略 分 級 式	耕地面積 (ha)	備 考
東茶志骨 - 東茶志骨	NwIII fnae	245	農牧適地...2,595 (ha)
標津原野 - 標津原野	NwIII naeIf	239	" ... 2,537
ウラツブ - ウラツブ	II dpwfni	8	" ... 58

2) 土壤統別説明

コ ウ ロ シ 統

(1) 土壤統概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ25cm内外、土性はCLである。腐植含量16.1%、色は7.5YRで明度2、彩度1である。礫なく発達弱度の粒状構造、細孔あり、ち密度16で中、pH(H₂O)5.4、下層との境界は判然である。

第2層は厚さ20cm内外、土性はLである。腐植含量15.7%、色は10YRで明度3、彩度3である。礫なく、発達中度の粒状構造、細孔、小孔あり、ち密度18で中、pH(H₂O)5.7、下層との境界は明瞭である。

第3層は厚さ13cm内外、土性はSLである。腐植含量15.0%、色は7.5YRで明度2、彩度2である。礫なく、発達弱度の粒状、塊状構造あり、細孔あり、ち密度20で中、pH(H₂O)5.8、下層との境界は判然である。

第4層は17cm内外、土性はSLである。腐植含量7.4%、色は10YRで明度4、彩度3である。発達中度の細塊状構造、ち密度20で中、pH(H₂O)5.8、下層との境界は明瞭である。

第5層は75cm以下で浮石礫層である。

代 表 的 断 面 形 態

(所在地) 標津郡標津町コウロシ 試坑No.60

層 位	厚 さ (cm)	土 質 特 徴
第 1 層	0~25 cm	腐植に富む黒(7.5YR 2/1)のCL、発達弱度の粒状構造、細孔あり、ち密度16で中、pH(H ₂ O)5.4、層界判然。
第 2 層	25~45 cm	腐植に富む暗褐(10YR 3/3)のL、発達中度の粒状構造、細小孔あり、ち密度18で中、pH(H ₂ O)5.7、層界明瞭。
第 3 層	45~58 cm	腐植に富む黒褐(7.5YR 2/2)のSL、発達弱度の粒状、細塊状構造あり、細孔あり、ち密度20で中、pH(H ₂ O)5.8、層界判然。
第 4 層	58~75 cm	腐植を含む灰黄褐(10YR 4/3)のSL、発達中度の細塊状構造、ち密度20で中、pH(H ₂ O)5.8、層界明瞭。
第 5 層	75 cm~	浮石層

代 表 的 断 面 の 分 析 成 績

層位	採取部 位 cm	水分 %	粒 径 組 成 %				土 性	現地容 積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐 植 %
			粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0-25	6.7	2.8	43.5	35.1	18.6	CL	50.7	2.1	9.36	0.66	14	16.1
2	25-45	9.0	8.1	51.6	31.2	9.1	CL	49.2	2.3	9.13	0.54	17	15.7
3	45-58	11.2	23.6	48.3	22.6	5.5	SL	46.4	2.3	8.70	0.50	17	15.0
4	58-75	11.7	37.7	46.7	15.6	0	SL	61.5	2.2	4.32	0.39	11	7.4

層位	pH		置換酸度 Y_1	塩基置換容量 $me/100g$	置換性塩基 $me/100g$			石灰飽和度 %	磷酸吸収係数	有効態磷酸 $mg/100g$
	H_2O	KCl			CaO	MgO	K_2O			
1	5.4	4.4	5.50	29.2	0.98	0.97	0.80	33.4	1,740	1.0
2	5.7	4.7	2.25	40.5	5.24	0.53	0.25	18.1	2,719	tr
3	5.8	4.9	1.00	45.2	0.24	0.54	0.12	5.3	2,810	tr
4	5.8	5.4	0.25	26.5	0.21	0.54	0.04	7.1	2,824	tr

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する統としては崎無異統があるが母材、堆積様式が異なるので本統と区分される。

A-3 母材 非固結火成岩

A-4 堆積様式 風積

B 地形 平坦～緩傾斜地

C 気 候

海洋の影響を強く受け、夏季は冷涼でかつ盛夏海霧の襲来が多く、このため日照不足、温度の下降湿度の上昇もたらされる。

冬季は積雪量少く、土壌が凍結して春季の農耕開始を遅延せしめる等農業上不利な気候下にある。

D 植生及び利用状況

一部耕地に利用されているが管理は粗放で収量は低い。大部分はまだ山林原野のままとなつていて主として放牧地、採草地となつている。

E 農業上の留意事項

本地域は一般畑作物には不利な気象条件下にあるため主畜経営が行なわれ牧草を主体とする飼料作物の作付面積が多い、しかし収量は低く、極めて低生産の永年牧草地が存在している。酪農経営の強力な推進のためには一般牧草畑の草生増加を図ることは勿論であるが、永年牧草地の更新、あるいは草生改良による牧草生産量の増大が差し当つて必要である。この外は川北統-1区に準ずるので参照されたい。

F 分 布

標津郡標津町コウロシ

調査及び記載責任者 菊地晃二（北海道立中央農業試験場）

昭和41年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土 壤 区 名	簡 略 分 級 式
コウロシ統-コウロシ区	III n II f e

② 土壌区別説明

コウロシ統 - コウロシ区

示性分級式 (畑)

土表有表耕	土	自	養	障	災	傾	侵
裏効土	表表表	透保湿	保固土	置	有微酸	有物	増地
生土土	耘土土	地	然	層分換	効	害理	冠す
産土の	土の	風	の	の	性	態	量
力の層	のの	乾	の水	水潤肥	肥定塩	の石	苦加
可能	の礫	粘	土	基	灰土	里酸	要
性厚	含難	土着	乾	沃	状豊	含	
等深	性性	さ	湿	度	否	性	性
級	さ	量	易	度	否	性	性
	t d g p	w	f	n	i	a	s e
Ⅳ	I I I I	2 1 1	I 1 2 1	Ⅱ 1 3 2	Ⅲ 3 2 1 3	- 2 I 1 1 I 1 1 I 1	-- Ⅱ 1 2 2
簡略分級式	Ⅲ n Ⅱ f e						

A 土壌区の特徴

この土壌区はコウロン統に属する。表土の厚さは2.5cm、有効土層は1m以上で深い。土性は粘質で農具の使用にあたってわずかに低坑がある。過湿、過干のおそれは少ない。保肥力大、固定力中で自然肥沃度は中庸である。石灰、リン酸少く、加里は多い、酸度は中、養分の豊否は少ない。障害性はない。地形は平坦である。

B 植生及び利用状況

大部分は山林原野となつているが一部は耕地に利用され、えん麦、牧草等が作付けられている。管理状況はおくれている。

C 地力保全上の問題点

劣悪な気象条件下にあるため主畜経営が採用されており、牧草を主とする良好な飼料の増産が目下の課題である。このためには一般飼料畑の収量増加、低位生生産永年牧草地の草生改良、更新がある。また採草量の低い放牧地、原野等の簡易牧野の造成が上げられる。土壌は磷酸固定力が極めて強く、可給態の磷酸、加里が低い特徴を有している。即ち未墾地は窒素、加里はあるが極端な磷酸欠乏を来たし、経年畑、永年牧草地に於いては窒素、加里の欠乏を来たしている。

D 分布

標津郡標津町コウロン

調査及び記載責任者 菊地晃二 (北海道立中央農業試験場)

昭和41年3月31日

古 多 糠 統

(1) 土壌統の概説

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ1.6cm内外、土性はLである。腐植含量14.0%、色は7.5YRで彩度3、明度2である。礫なく、発達弱度の粒状構造、細孔あり、ち密度1.5で中、pH (H₂O) 6.0、下層との境界は判然である。

第2層は厚さ1.4cm内外、土性はLである。腐植含量12.4%、色は7.5YRで彩度2、明度である。

礫なく発達弱度の粒状構造、孔隙なし、ち密度1.6で中、pH (H₂O) 6.1、下層との境界は明瞭である。

第3層は厚さ10cm内外、土性はLである。腐植含量19.2%、色は10YRで彩度1、明度1である。礫なし、孔隙なし、ち密度1.6で中、pH (H₂O) 5.9、下層との境界は明瞭である。

第4層は厚さ13cm内外、土性はSLである。腐植含量8.2%、色は10YRで彩度3~8明度3~5である。浮石礫に富む。ち密度1.8で中、pH (H₂O) 6.1、下層との境界は明瞭である。

第5層は厚さ20cm内外、土性はCLである。腐植に富み色は7.5YRで彩度2、明度2である。礫なく、発達弱度の粒状構造、孔隙なし、ち密度2.2で中、下層との境界は判然である。

代表的断面形態

(所在地) 標津郡標津町古多糠 試坑No.65

第1層	0~16cm	腐植に富む黒褐(7.5YR 2/3)のL、発達弱度の粒状構造、細孔あり、ち密度1.5で中、pH (H ₂ O) 6.0、層界判然。
第2層	16~30cm	腐植に富む黒褐(7.5YR 2/2)のL、発達弱度の粒状構造、ち密度1.6で中、pH (H ₂ O) 6.1、層界明瞭。
第3層	30~40cm	腐植に富む黒(10YR 1/1)のL、礫なく、孔隙なし、ち密度1.6で中、pH (H ₂ O) 5.9、層界明瞭。
第4層	40~53cm	腐植を含む暗褐(10YR 3/3)のSL、浮石礫に富む、ち密度1.8で中、pH (H ₂ O) 6.1、層界明瞭。
第5層	53~70cm	腐植に富む黒褐(7.5YR 2/2)のCL、礫なく発達弱度の粒状構造、ち密度2.2で中、層界判然。

代表的断面の分析成績

層位	採取部 位 cm	水分 %	粒径組成(%)				土性	現地容 積重%	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
			粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0-16	5.6	4.9	40.6	40.7	13.8	L	60.0	2.3	8.11	0.48	1.7	14.0
2	16-30	8.3	12.9	49.4	29.0	8.7	L	46.8	2.2	7.19	0.43	1.7	12.4
3	30-40	11.3	12.8	51.4	29.9	5.9	L	42.0	2.3	11.57	0.60	1.9	19.2
4	40-53	10.7	30.3	48.5	19.5	1.7	SL	36.9	2.3	4.77	0.29	1.6	8.2

層位	pH		置換酸 度 Y ₁	塩基置換 容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽 和度 %	磷酸吸 収係数	有効態磷 酸 mg/100g
	H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	6.0	5.0	0.50	29.3	12.60	2.53	0.37	43.0	1.455	1.0
2	6.1	5.1	0.50	30.4	4.16	1.38	0.77	13.7	2.571	tr
3	5.9	4.9	0.75	49.0	4.29	0.90	1.00	8.6	2.927	0.2
4	6.1	5.5	0.00	23.8	0.72	5.68	0.12	3.2	2.696	tr

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する統としては忠類統、糸楯別統があるが忠類統とは堆積様式が異なり、糸楯別統とは地下水位の高低が異なることから本統と区分した。

A-3 母材 非固結火成岩

A-4 堆積様式 風積

B 地形 平坦～波状性緩傾斜地

C 気 候

海洋の影響を強く受ける。夏季は冷涼で、かつ盛夏海霧の襲来が多く、このため日照不足、温度の下降、湿度の上昇がもたらされる。冬季は積雪量少く、土壌が凍結し、春季の農耕開始を遅延せしめる等農業上不利な気候下にある。

D 植生及び利用状況

面積の半ば以上は耕地として利用され、耕地には馬鈴薯、牧草、飼料作物等が栽培されているがその収量は低い、特に牧草畑の中には生産量の極めて低い永年牧草地在存在している。耕地以外は山林及び放牧地となっている。

E 農業上の留意事項

本地域は一般畑作物には不利な気象条件下にあるため、主畜経営が行なわれ、牧草を主体とする飼料作物の作付面積が多いが、収量が低く、又極めて低生産の所謂永年牧草地在存在している。酪農経営の強力な推進のためには、一般牧草畑の草生増加を図ることは勿論のこと、永年牧草地の更新、或は草生改良による牧草生産量の増大が差し当たつての問題であり、更に比較的利用度の低い放牧地の利用効果を高めるための簡易牧野の造成等が今後望まれるところである。

永年牧草地は極端に養分含量が低下しており、又一般耕地、牧草畑も窒素、加里等の含量が低下しているが、経年畑地の施肥は開墾当初とは当然変えて行かなければならず、磷酸質肥料の多用に主体がおかれ、加里等塩基の補給はなされず、加里欠乏の発生が認められ牧草畑の施肥改善、永年牧草地の施肥法等について検討を要する。なおこの点に関しては道立農業試験場根創農試が詳細な調査研究を行ない、当地帯の農業経営に貴重な示唆を与えているので参照されたい。

F 分 布

標津郡標津町古多糠

調査及び記載責任者 菊地晃二（北海道立中央農業試験場）

昭和41年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土壌区名	簡略分級式
古多糠統—古多糠区	II g w f i e

② 土壌区別説明

古多糠統 — 古多糠区

第1層は厚さ12~14cmで、腐植含量は13~16%、土性はLが主である。色は10YR~2.5Yで、彩度1~3、明度2~3である。

礫は存在しない。発達弱度の細粒状構造を呈し、ち密度12~17で疎である。pH(H₂O)5.6~6.0、下層との境界は直線明瞭である。

第2層は厚さ5cm前後で、腐植含量13%内外、土性はLが主である。色は10YR~2.5Yで彩度1~2、明度2~3である。

発達弱度の細粒状構造又は単粒構造である。ち密度14~18で疎である。pH(H₂O)5.7~6.0、下層との境界は波状少々明瞭である。

第3層は厚さ3cm前後、腐植含量11~12%、土性はLが主である。色は10YR~2.5Yで彩度1~4、明度3である。半風化、風化細小角礫を含み、発達弱度の細粒状構造又は単粒構造を呈し、細孔を含む、ち密度16~18で疎である。pH(H₂O)5.6~5.9、下層との境界は波状少々明瞭である。

第4層は厚さ5~7cm、腐植含量13~17%、土性はSL~Lである。色は10YR~2.5Yで彩度1~3、明度2~3である。風化、腐朽細小半角礫を含み、発達弱度の粒状構造もしくは単粒状構造を呈する。ち密度16前後で疎である。pH(H₂O)5.7~6.0、下層との境界は波状漸変である。

第4層は厚さ5~10cmで、腐植含量6~10%、土性はSLが主である。風化、腐朽細小半角礫に富み、単粒状構造を呈す。ち密度16~18で疎である。pH(H₂O)5.8~6.1、下層との境界は波状少々明瞭である。

第6層は厚さ10~20cm、腐植含量は17~22%、土性はL~SLである。色は10YR~2.5Yで彩度0~2、明度1~2である。腐朽細半角礫を僅かに含み、均質連結状構造を呈す。

ち密度17~18で疎である。pH(H₂O)5.9~6.1、下層との境界は波状漸変である。

第7層は10~15cm、腐植含量11~13%、土性はSLである。色は10YR~2.5Yで彩度4~6、明度2~4である。風化、腐朽細小半角礫を含む~富む。主に均質連結状構造を呈す。ち密度17~18で疎である。下層との境界は不規則少々明瞭である。

第8層は概ね50~60cm、或は80~90cm以下で、半風化、風化の半角浮石礫となっている。一部この浮石礫層がセメント化して、堅密層になっているところがある。

代表的断面型態

(所在地) 標津郡標津町字川北 試坑No.53

第1層	0~12cm	腐植に頗る富む黒褐色(10YR3/1)のL、礫なく発達弱度の細粒状構造、ち密度15で疎、pH(H ₂ O)5.6、調査時の湿り湿、層界直線明瞭(農林省北海道農試土性調査報告第13編によれば主としてMe-1a、Me-2a火山灰層、旧名Ma-a)。
第2層	12~15cm	腐植に頗る富む黒褐色(10YR3/1)のL、礫なく、発達弱度の細粒状構造、細孔を含む、ち密度14で疎、pH(H ₂ O)5.7、調査時の湿り湿、層界波状少々明瞭(農林省北海道農試土性調査報告第13編によればM、Km-2a火山灰、旧名Ma-b、C ₁ 火山灰層)。
第3層	15~18cm	腐植に頗る富む暗褐色(10YR3/3)のL、半風化、風化細小角礫を含み、発達弱度の細粒状構造、細孔を含む、ち密度16で疎、pH(H ₂ O)5.6、調査時の湿り湿、層界波状少々明瞭(農林省北海道農試土性調査報告第13編によればM、Km-e火山灰、旧名M-Y火山灰層)。

第 4 層	18~25 cm	腐植に頗る富む、黒褐色 (2.5 Y 2/2) の SL、風化、腐朽細半角礫を含む、単粒構造、細孔あり、ち密度 1.6 で疎、pH (H ₂ O) 5.7、調査時の湿り湿、層界波状漸変 (農林省北海農試土性調査報告第 13 編によれば M、Km-1 f 火山灰層、旧名 M-d ₁ 火山灰層)。
第 5 層	25~32 cm	腐植に富む暗黄褐色 (2.5 Y 4/4) の SL、風化、腐朽細半角礫に富む~頗る富む、単粒構造、細小孔に富む、ち密度 1.6 で疎、pH (H ₂ O) 6.1、調査時の湿り湿~潤、層界波状稍々明瞭 (農林省北海道農試土性調査報告によれば M、Km-1 f 火山灰層、旧名 M-d ₁ 火山灰層)。
第 6 層	32~38 cm	腐植に頗る富む黒色 (2.5 Y 1/0) の L、腐朽細半角礫を僅かに含み、均質連結状構造、ち密度 1.7 で疎、pH (H ₂ O) 6.1、調査時の湿り湿、層界波状稍々明瞭 (M-e とと思われる)。
第 7 層	38~53 cm	腐植に頗る富む、黒褐色 (2.5 Y 3/4) の SL、風化、腐朽細半角礫に富み、単粒状構造、ち密度 1.6 で疎である。調査時の湿り湿~潤、層界波状稍々明瞭 (M-f ₁ 火山灰層)。
第 8 層	53~63 cm	腐植を欠く明黄褐 (2.5 Y 6/8) の S、風化、腐朽細小半角礫に頗る富む、単粒構造、調査時の湿り湿~潤、層界直線明瞭 (M-f ₁ 火山灰層)。
第 9 層	63 cm 以下	腐植を欠く明橙褐色 (7.5 Y R 5/8) の半風化細小半角、角礫層 (M-g、M-h、M-i 層)。

代表的断面の分析成績

層位	深さ cm	水分 %	粒 径 組 成 %				土性	現地容 積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率
			粗砂	細砂	シルト	粘土						
1	0-12	6.2	5.1	39.8	41.5	13.6	L	55.3	2.28	7.75	0.51	15
2	12-15	5.9	6.0	41.4	41.0	11.5	L	} 55.6	} 2.32	5.90	0.51	10
3	15-18	8.7	11.4	34.8	43.2	10.6	L			7.18	0.48	15
4	18-25	10.9	28.5	38.1	31.8	1.6	SL	} 46.0	} 2.51	8.73	0.52	17
5	25-32	7.7	35.3	49.6	14.7	0.4	SL			3.44	0.34	10
6	32-38	12.0	12.8	51.1	29.7	6.5	L	} 47.2	} 2.33	10.10	0.53	19
7	38-53	11.7	9.8	63.9	26.1	0.1	SL			8.24	0.50	16

腐植 %	pH		置換酸 度 Y ₁	置換容 量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石 灰 飽和度 %	磷酸吸 収係数	有効態 磷 酸 mg/100g	N/5HCl 可溶	
	H ₂ O	KCL			CaO	MgO	K ₂ O				磷酸 mg/100g	加里 mg/100g
13.4	5.6	4.8	2.00	18.8	3.9	0.8	0.2	21.0	1.730	痕跡	5.9	5.8
13.3	5.7	4.9	1.75	18.0	4.1	1.1	0.2	23.1	—	痕跡	5.8	4.8
11.3	5.6	4.9	1.00	21.7	3.8	0.9	0.1	17.7	2.421	—	2.0	2.3
15.1	5.7	4.9	1.00	12.5	4.4	0.7	0.1	35.1	2.702	—	1.0	2.0
5.9	6.1	5.2	0.25	12.8	2.2	0.5	0.1	16.9	2.213	—	—	—
17.4	6.1	5.1	0.50	37.4	6.2	0.9	0.1	16.7	2.873	—	—	—
13.9	6.3	5.3	0.25	30.1	4.9	1.4	0.1	16.2	2.947	—	—	—

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する統は川北北統、ウラツプ統があるが、何れも堆積様式が異なるので本統と区別される。

A-3 母材 非固結火成岩、半固結火成岩

A-4 堆積様式 風積(火山性)

B 地形

標高40～130の平坦又は緩傾斜を有する台地。

C 気候

海洋の影響を強く受ける。夏季は冷涼で、かつ盛夏海霧の襲来が多く、このため日照不足、温度の下降、湿度の上昇がもたらされる。冬季は積雪量少く、土壌が凍結し、春季の農耕開始を遅延せしめる等農業上不利な気候下にある。

D 植生及び利用状況

面積の半ば以上は耕地として利用され、耕地には馬鈴薯、牧草、飼料作物、ビート等が栽培されているが、その収量は低い。特に牧草畑の中には生産量の極めて低い所謂永年牧草地が存在している。

耕地以外は山林及び放牧地に利用されている。

E 農業上の留意事項

本地域は一般畑作物には不利な気象条件下にあるため、主畜経営が行なわれ、牧草を主体とする飼料作物の作付面積が多いが、収量が低く、又極めて低生産の所謂永年牧草地が存在している。酪農経営の強力な推進のためには、一般牧草畑の草生増加を図ることは勿論のこと、永年牧草地の更新、或は草生改良による牧草生産量の増大が差し当つての問題であり、更に比較的利用度の低い放牧地の利用効果を高めるための簡易牧野の造成等が今後望まれるところである。

永年牧草地は極端に養分含量が低下しており、又一般耕地、牧草畑も窒素、加量等の含量が低下しているが、経年畑地の施肥は開墾当初とは当然変えて行かなければならず、磷酸質肥料の多用に主体がおかれ、加里等塩基の補給はなされず、加里欠乏の発生が認められ牧草畑の施肥改善、永年牧草地の施肥法等について検討を要する。なおこの点に関しては道立農業試験場根釧農試が詳細な調査研究を行ない、当地帯の農業経営に貴重な示唆を与えているので参照されたい。

F 分布

標津郡標津町川北、茶志骨

調査及び記載責任者 高尾欽弥(北海道立中央農業試験場)

昭和39年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土壌区名	簡略分級式
川北統 - 1区	II f n e II d w
" - 2区	III f n e II d w s

② 土壌区別説明

川北統 - 1区

示性分級式

土壌	表土	表土	耕土	表土	表土	(土)	(土)	(自)	(固)	(土)	(養)	(置)	(置)	(有)	(酸)	(障)	(物)	(傾)	(自)	(傾)	(人)	(侵)	(耐)	(耐)						
産力	の	層	の	の	の	粘	乾	の	水	潤	肥	肥	定	塩	の	石	苦	加	磷	害	障	障	害	害						
可	能	性	厚	深																										
等	級	さ	さ	量	易																									
III	I	II	I	I	1	1	1	II	1	2	III	1	2	3	III	2	2	3	3	2	I	1	1	I	1	--	III	1	3	3
簡略分級式 III f n e II d w																														

A 土壌区の特徴

この土壌区は川北統に属する。作土の厚さは15cm以内で比較的浅く、有効土層は50cm~70cmで中庸である。作土は中粒質で、粘着性弱く、農具の使用は容易である。凡そ10種類以上の火山噴出物の累層からなり、表層50cm前後までは腐植に頗る富む多腐植層で腐朽浮石礫を含み、又富む層をも介在している。

この浮石礫は保水性が極めて強く、多量の水分を保持しているため、土壌の水分含量を高め、蒸発量の少い気象条件と相まつて土壌を湿性を状態にしている。

地表から50~60cm以下は浮石礫に熔岩片を混ざる礫層で、風化の程度は稍々低い水分を含んでいる。

肥力中〜大、磷酸固定力は強大であり、土層の塩基状態も稍々不良である。

養分は窒素、加里、磷酸の可給態含量が低い。北海道立農業試験場根創農試の研究によれば、土壌中の窒素の給源となる栄養腐植の耐用年限は開墾後5~6年までで、その後は急激に低下し、追肥を行なわない牧草地（特に禾本科牧草）は窒素欠乏を来たすことが多い。加里は開墾当初は可給態加里に富むが、土壌の鉱物組成から見て加里供給が乏しく、数年にして加里の凋枯を招来し、更に経年畑に於いては磷酸の多施により加里の不可給態化が促進されるとし、低位生産永年牧草地、穀栽栽培畑の多くは可給態加里に凋枯しており、加量を取量の生産阻害要因となつていることが多い。

B 植生及び利用状況

面積の中ば以上は耕地に利用され、それ以外は山林、又は家畜の放牧に利用されている。耕地には馬鈴薯、牧草、飼料作物、ビート等が栽培されているが、その取量は低く、特に牧草地の中には生産量の極めて低い永年牧草地がある。

C 地力保全上の問題点

劣悪な気象条件のため主畜経営が採用されており、牧草を主とする良好な飼料の増産が目下の課題である。これがためには一般飼料畑の取量増加、低位生産永年牧草地の草生改良或は更新があり、又、採草量の低い放牧地、原野等の簡易牧野の造成が掲げられる。

土壌は磷酸固定力が極めて強く、可給態の磷酸、加里含量が低い特徴を有している。

即ち未墾地は窒素、加里はあるが、極端な磷酸欠乏を来し、経年畑、永年牧草地に於いては窒素、加里の欠乏を来している。

これに関しては道立農業試験場根創農試の詳細な研究がある。その概要を照介すれば次の如くである。

イ 経年畑における牧草施肥

チモシー類

窒素；増施による増収効果が最も高いが作付初年目は多施すると利用率の低下が見られるので5～6Kg（10a当り要素量）に留めた方がよい。2年目以降は最も欠乏し、かつ残効が少ないので10～11Kg（10a当り要素量）まで施肥しても増収効果がある。

磷酸；初年目のみ施肥量の増加に伴い収量も増加するが、2年目以降はチモシーが土壌中の固定磷酸をかなり利用するので、施肥効果が低く、多用すると加里欠乏を惹起する等して反つて減収する傾向にあるから初年目にまとめて5～6Kg（10a当り要素量）以上を施用し、2年目以降は1.9Kg（10a当り要素量）以下にすることが望ましい。

加里を施用しないで磷酸を多施すると加里欠乏を惹起し、減収となる。

加里；初年目の必要量は比較的低く、多施すると贅沢吸収傾向があるが、土壌中の加里含量が低い傾向にあるので、2～3Kg（10a当り要素量）程度でよい。しかしチモシーの加里収奪量は大きく、2年目以降はその必要量が増加するので、5～6Kg（10a当り要素量）の施用が望ましい。

クロバー類

窒素；根瘤が着生するので窒素を控え目にしなければならぬことは当然で、多施するとかえつて減収を招くから1.9Kg（10a当り要素量）以下にすべきである。

磷酸；2年間に於いても肥効あり、3年目は肥効が低下するから、5～6Kg（10a当り要素量）とし、3年目は5Kg（10a当り要素量）以下でよい。

加里；2年目までは多施すると贅沢吸収する傾向があるから大凡5Kg（10a当り要素量）程度でよいが、3年目は必要量が増加し、11Kg（10a当り要素量）まで施用しても充分増収効果がある。特に禾本科牧草との混播の場合はチモシー等の加里吸収力が強いので、土壌中に加里が少ない場合はチモシーとの場合によつてクロバーは加里欠乏に陥り、収量割合が低下するから充分な施用が必要である。

又、苜蓿混播の場合、クロバーは窒素の多用により減収となるので、窒素用量には充分注意が必要である。

ロ 新墾地の牧草作付については、従来行なわれて来た磷酸多施を中心とした施肥法でよく、開墾後4～5年までは窒素、加里は土壌にかなりあるので、経年畑より少い施肥量でよいことになる。

ハ 当地域は根雪が遅く、気温が低いので晩秋から初冬にかけて土壌が凍結する。この土壌凍結によつて表土が浮上し、直根性牧草の幼植物が著しい傷害を受け、所謂冬枯れを生ずる。このような表土の隆起は概ね5cmであるので、土壌凍結開始以前に少くとも牧草根を5cm以上に伸長させておくことが必要である。（特にルーサン、赤クロバー）

又、これと関連して雪腐病の被害もある（オーチャードグラス、メドフエスク、グロームグラス、ライグラス等）。

これらの被害を回避する安全な方法は、赤クロバーは8月中旬までに播種し、播種期の遅れたものは磷酸と窒素を多用して越冬前までに幼植物体内の養分濃度を高める。

オーチャードグラスは9月上旬までに磷酸と窒素を充分施用して播種すれば被害が少く、厩肥を施用すれば更に安全である。

チモシーは冬枯れに対する抵抗性が大きく播種期が遅れても枯損が少ないようである。

雪腐病による枯損防止には農薬撒布の他、新墾地では磷酸、経年畑では窒素を増施すると効果がある。

2. 牧野の簡易造成

一般に簡易造成の際は早春融雪直後土壌が澁潤な時に播種すると活着数及びマメ科、イネ科の混生比が良好となるので、このためには前年秋に火入れ、土壌改良資材の撒布、デスク等による表層攪乱をしておくといふ。早春に播種しても霜凍害は軽微である。

養分は、燐酸、加里の可給態含量が低い。道立根釧農試の成績によれば、土壌中の窒素供給源である栄養腐植の耐用年限は開墾後5～6年までで、その後は急激に低下し、追肥を行わない禾本科牧草地は窒素欠乏を来すことが多く、又加里も窒素同様土壌中の供給源が乏しく開墾後数年にして凋萎し、永年牧草地では特に可給態加里含量が少く、加里に欠乏している。

更に経年畑に於いては燐酸の多用により加里欠乏を誘発する傾向があり、可給態加里の少い永年牧草地、穀菽栽培畑の施肥改善の必要が示されている。

傾斜を有するので、春季融凍時或は多量の降水があつた場合は水蝕の被害を受ける。

伏流水の影響を若干受けて過湿となるおそれがある。

B 植生及び利用状況

面積の半ば近くは耕地に利用され、それ以外は山林又は家畜の放牧地として利用されている。耕地には馬鈴薯、牧草、飼料作物、ビート等が栽培されているが、収量は低く、特に牧草地の中には生産量の極めて低い永年牧草地がある。

C 地力保全上の問題点

傾斜を有するため春季融雪時、多量の降水時には水蝕の被害を受けるので、一般作物と牧草の作付にはこの点を充分加味し、又緑作帯の設置等によつて水蝕の被害を軽減する必要がある。

土壌は一般に半湿性を呈するが、伏流水の影響等により過湿となるところがあるからかかるところは排水溝を設置して過剰な地下水を排除する必要がある。

劣悪な気象条件のため畜産経営の推進が行なわれ、牧草を主とする良好な飼料の増産が重要事項である。これについては川北統一1区の項を参照されたい。

D 分 布

標津郡標津町 川北、茶志骨

調査及び記載責任者 高尾欽弥(北海道立中央農業試験場)

昭和39年3月31日

糸 櫛 別 統

(1) 土壌統概説

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ20cm内外、土性はLである。腐植含量17.0%、色は7.5YRで彩度2、明度2である。礫なく、発達弱度の粒状構造あり、孔隙なし、ち密度1.6で中、pH(H₂O)5.2、下層との境界は判然である。

第2層は厚さ12cm内外、土性はCLである。腐植含量18.7%、色は7.5YRで彩度1、明度2である。礫なく発達弱度の粒状、細塊状構造あり、細孔あり、ち密度1.6で中、pH(H₂O)5.5、層界は判然である。

第3層は厚さ23cm内外、土性はLである。腐植含量11.3%、色は7.5YRで彩度3、明度2である。浮石礫富む、発達弱度の細塊状構造あり、細小孔あり、ち密度1.8で中、pH(H₂O)5.7、下層との境界は明瞭である。

第4層は厚さ20cm内外、土性はLである。腐植含量10.2%、色は7.5YRで彩度1、明度1である。礫なく発達弱度の細塊状構造あり、細孔含む、ち密度1.8で中、pH(H₂O)5.9、下層との層界は明瞭である。

第5層は厚さ21cmで、土性はSLである。腐植含量10.0%、色は7.5YRで彩度3、明度3である。浮石礫に富む、発達弱度の細塊状構造あり、細小孔あり、ち密度2.4で中、pH(H₂O)6.1、

下層との境界は明瞭である。

代表的断面形態

(所在地) 標津郡標津町糸櫛別 試坑 1667

第 1 層	0~20cm	腐植に富む黒褐 (7.5 YR 2/2) の L、礫なく発達弱度の粒状構造、孔隙なし、ち密度 1.6 で中、pH (H ₂ O) 5.2、層界判然。
第 2 層	20~32cm	腐植に富む黒 (7.5 YR 2/1) の CL、礫なく発達弱度の粒状、細塊状構造、細孔あり、ち密度 1.6 で中、pH (H ₂ O) 5.5、層界判然。
第 3 層	32~45cm	腐植に富む黒褐 (7.5 YR 2/3) の L、浮石礫に富む、発達弱度の細塊状構造、細孔、小孔あり、ち密度 1.8 で中、pH (H ₂ O) 5.7、層界明瞭。
第 4 層	45~65cm	腐植に富む黒 (7.5 YR 1/1) の L、礫なく発達弱度の細塊状構造、細孔含む、ち密度 1.8 で中、pH (H ₂ O) 5.9、層界明瞭。
第 5 層	65~86cm	腐植に富む暗褐 (7.5 YR 3/3) の SL、浮石礫に富み、発達弱度の細塊状構造、細孔、小孔あり、ち密 2.4 で中、pH (H ₂ O) 6.1、層界明瞭。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	粒径組成 %				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
			粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0-20	5.5	3.8	49.4	33.6	13.4	L	50.9	2.2	9.88	0.60	16	17.0
2	20-32	8.3	7.6	39.9	36.2	16.3	CL	52.6	2.3	10.83	0.65	17	18.7
3	32-45	9.9	15.7	45.7	29.6	9.0	L	51.6	2.2	6.55	0.54	12	11.3
4	45-65	10.5	14.7	47.1	28.3	9.9	L	58.6	2.4	5.94	0.55	11	10.2
5	65-86	10.3	15.6	57.7	22.4	4.3	SL	-	-	5.82	0.40	15	10.0

層位	pH		置換酸度 Y ₁	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 %	燐酸吸収係数	有効態燐酸 mg/100g
	H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	5.2	4.3	7.75	32.1	2.86	10.00	0.19	8.9	1.835	0.4
2	5.5	4.5	3.25	41.5	4.85	1.38	0.97	10.4	2.553	tr
3	5.7	4.8	1.00	38.8	4.23	1.41	0.79	10.9	2.822	tr
4	5.9	4.9	0.75	44.7	6.57	1.24	0.99	14.7	2.842	0.2
5	6.1	5.4	0.25	28.5	3.90	1.42	0.12	13.7	-	tr

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する統としては古多糠統、川北統があるが母材、堆積様式が同じであるが地下水位が異なることから本統と区分される。

A-3 母材 非固結火成岩

A-4 堆積様式 風積

B 地形 緩傾斜地

C 気候

海洋の影響を強く受ける。夏季は冷涼で、かつ盛夏海霧の襲来が多く、このため日照不足、温度の

下降、湿度の上昇もたらされる。冬季は積雪量少く、土壌が凍結し、春季の農耕開始を遅延せしめる等農業上不利な気候にある。

D 植生及び利用状況

面積の大半は耕地として利用されずに林地、放牧地となつている。耕地には牧草、飼料作物等が栽培されているがその収量は低い。特に牧草畑の中には生産量の極めて低い永年牧草地が存在している。

E 農業上の留意事項

本地域は一般畑作物には不利な気象条件下にあるため、主畜経営が行なわれ、牧草を主体とする飼料作物の作付面積が多いが、収量が低く、又極めて低生産の所謂永年牧草地が存在している。酪農経営の強力な推進のためには、一般牧草畑の草生増加を図ることは勿論のこと、永年牧草地の更新、或は草生改良による牧草生産量の増大が差し当つての問題であり、更に比較的利用度の低い放牧地の利用効果を高めるための簡易牧野の造成等が今後望まれるところである。

永年牧草地は極端に養分含量が低下しており、又一般耕地、牧草畑も窒素、加里等の含量が低下しているが、経年畑地の施肥は開墾当初とは当然変えて行かなければならず、磷酸質肥料の多用改善、永年牧草地の施肥法等について検討を要する。

F 分 布

標津郡標津町糸櫛別

調査及び記載責任者 菊地晃二 (北海道立中央農業試験場)

昭和41年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覽

土 壌 区 名	簡 略 分 級 式
糸櫛別統一糸櫛別区	IIIwfIIgniae

② 土壌区別説明

糸 櫛 別 統 — 糸 櫛 別 区

示性分級式 (畑)

土 壤 生 産 力 の 可 能 性 等 級	表 効 土 土 の 層 厚 深 さ	表 土 土 の 粘 土 性 易	耕 表 土 の 風 乾 土 着 湿	透 地 水 潤 沃	自 然 肥 沃 力 度	保 固 肥 定 状	養 置 換 性 灰 土 否	微 効 量 加 燐 酸 要 素 度 性	障 害 物 質 障 害 無 性	災 害 理 的 障 害 無 性	傾 冠 水 の 危 險 度 斜	傾 地 す べ り の 危 險 度 斜	自 然 傾 方	侵 入 為 傾 斜 向 斜 傾 度 性	侵 耐 水 蝕 蝕 性	耐 耐 風 蝕 蝕 性
t d g p			w		f		n		i	a	s		e			
III I I II I 1 1 1 III 2 3 3 III 1 3 3 II 1 3 1 2 ~ 2 II 2 1 II 2 1 I 1 - - II 1 2 2																
簡略分級式		IIIwfIIgniae														

A 土壌区の特徴

この土壌区は糸筒別統に属する。表土の厚さは2.5cm以上、有効土層は1m以上で深い。土性は壤質で農具の使用に当つて抵抗はない。過湿のおそれが多い。保肥力大、固定力中で自然肥沃度は低い。石灰、加里多、苦土少、りん酸中、酸度は中で養分は中庸である。障害程度の小さい物理的障害あり、増冠水をうける危険性が多少ある。

B 植生及び利用状況

面積の大半は耕地として利用されずに林地、原野、放牧地となつている。耕地には牧草、飼料作物等が栽培されているがその収量は低い。特に牧草畑の中には生産量の極めて低い永年牧草地在存在している。

C 地力保全上の問題点

傾斜を有するため春季融雪時、多量の降水時には水蝕の被害を受けるので、一般作物と牧草の作付にはこの点を充分加味、又緑作帯の設置等によつて水蝕の被害を軽減する必要がある。

土壌は一般に半湿性を呈するが、伏流水の影響等により過湿となるところがあるからかかる場所は排水溝を設置して過剰な地下水を排除する必要がある。

劣悪な気象条件のため主畜経営の推進が行なわれ、牧草を主とする良好な飼料の増産が重要事項である。これらについては川北統-1区の項を参照されたい。

D 分 布

標津郡標津町糸筒別

調査及び記責任者 菊地晃二（北海道立中央農業試験場）

昭和41年3月31日

茶 志 骨 統

(1) 土壌統概説

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ1.7cm内外、土性はCLである。腐植含量20.8%、色は7.5YRで彩度2、明度2である。礫なく発達弱度の粒状構造あり、孔隙なし、ち密度1.0で疎、pH(H₂O)5.5、下層との境界は判然である。

第2層は厚さ1.7cm内外、土性はCLである。腐植含量12.8%、色は7.5YRで彩度1明度が2である。礫なく発達弱度の粒状構造あり、細孔、小孔あり、褐の斑紋あり、ち密度1.5で中、pH(H₂O)5.7、層界は漸変である。

第3層は厚さ2.9cm内外で、土性はSLである。色は7.5YRで明度2、彩度3である。礫なく、細孔に富む、褐の斑紋あり、ち密度1.8で中、下層との境界は明瞭である。

第4層、浮石礫層である。

代 表 的 断 面 形 態

(所在地) 標津郡標津町茶志骨 試坑No.76

第1層	0~1.7cm	腐植に富む黒褐(7.5YR 2/2)のCL、礫なく発達弱度の粒状構造、孔隙なしち密度1.0で疎、pH(H ₂ O)5.5、層界判然。
第2層	1.7~3.4cm	腐植に富む黒(7.5YR 2/1)のCL、礫なく発達弱度の粒状構造、細孔あり、褐の斑紋あり、ち密度1.5で中、pH(H ₂ O)5.7、層界漸変。
第3層	3.4~6.3cm	腐植を含む黒褐(7.5YR 3/2)のSL、礫なく、細孔に富む、褐の斑紋ありち密度1.8で中、pH(H ₂ O)6.0、層界明瞭。
第4層	6.3cm~	浮石礫層である。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	粒径組成 %				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
			粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0-17	7.0	5.3	41.3	37.4	16.0	CL	67.9	1.8	12.06	0.83	15	20.8
2	17-34	8.8	15.6	35.3	31.5	17.6	CL	69.4	2.0	7.45	0.57	13	12.8
3	34-63	10.5	19.9	48.3	24.2	7.1	SL	56.4	1.9	-	-	-	-

層位	pH		置換酸度 Y ₁	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 %	磷酸吸収係数	有効態磷酸 mg/100g
	H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	5.5	4.4	4.25	8.1	4.37	2.02	0.17	53.9	1.821	0.4
2	5.7	4.6	3.00	7.3	3.84	1.92	0.15	51.2	2.367	tr
3	6.0	4.9	0.75	10.2	2.68	1.24	0.23	26.2	2.685	0.4

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する統としては東茶志骨統、川北統がある。東茶志骨統とは堆積様式が異なり、川北統とは地下水位の高低が異なることからそれぞれ本統と区別される。

A-3 母材 非固結火成岩

A-4 堆積様式 風積

B 地形 平坦～緩傾斜地

C 気候

海洋の影響を強く受ける。夏季は冷涼でかつ盛夏海霧の襲来が多く、このため日照不足、温度の下降、湿度の上昇がもたらされる。冬期は積雪量少く土壌が凍結して春季の農耕開始を遅延せしめる等農業上不利な気候下にある。

D 植生及び利用状況

一部耕地に利用されているが管理が粗放で収量は低い。大部分は原野のままとなつて主として放牧地、野草の採草地となつている。

E 農業上の留意事項

過湿な土壌であるから明渠、暗渠排水を設置して土地の乾燥を計る必要がある。この外は川北統一区に準ずるので参照されたい。

D 分布

標津郡標津町茶志骨

調査及び記載責任者 菊地晃二（北海道立中央農業試験場）

昭和41年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土壌区名	簡略分級式
茶志骨統-茶志骨区	IIIw f IIg p n i s a e

② 土壌区別説明

茶志骨統 - 茶志骨区

示性分級式(畑)

土表有表耕(一)(一)土(一)(一)自(一)(一)養(一)(一)障(一)(一)災(一)(一)傾(一)(一)侵(一)(一)	壤効土表(一)(一)透保湿(一)(一)保固土(一)(一)置有微酸(一)(一)有物(一)(一)增(一)(一)地(一)(一)自傾(一)(一)侵(一)(一)	生土土の(一)(一)地然(一)(一)層分換(一)(一)有微酸(一)(一)害理(一)(一)冠す(一)(一)傾(一)(一)人(一)(一)侵(一)(一)	産土の(一)(一)の風乾(一)(一)の性(一)(一)効態量(一)(一)害物理(一)(一)水べり(一)(一)然斜為(一)(一)耐(一)(一)	力層の(一)(一)の粘土の(一)(一)の石苦加燐(一)(一)害質的(一)(一)ののの(一)(一)の傾(一)(一)斜為(一)(一)耐(一)(一)	可能厚深(一)(一)難土着(一)(一)乾(一)(一)沃(一)(一)基灰土里酸(一)(一)害障(一)(一)の危危(一)(一)傾(一)(一)斜為(一)(一)耐(一)(一)	性等厚深(一)(一)性性(一)(一)性性(一)(一)力力態(一)(一)量量量(一)(一)素度無性(一)(一)度度斜向斜(一)(一)度性性(一)(一)	級さ(一)(一)量易(一)(一)湿(一)(一)度(一)(一)否(一)(一)性(一)(一)性(一)(一)斜(一)(一)向(一)(一)斜(一)(一)度(一)(一)性(一)(一)													
	t d g p	w	f	n	i	a	s	e												
Ⅲ	I I II II 2 2 2 2 Ⅲ 3 3 3 Ⅲ 3 3 1 II 1 1 2 1 - 2 II - 2 II 2 1 I 1 - - II 1 2 2																			
簡略分級式 Ⅲ w f II g p n i s a e																				

A 土壤区の特徴

この土壤区は茶志骨統に属する。表土の厚さは25cm、有効土層は1mで深い。土性は粘質であるが農具の使用にあたって支障はない。透水性は中庸、保水力は大きく過湿のおそれが多い。保肥力小、固定力中自然肥沃度は低い。石灰苦土、リン酸多、加里中、酸度は中、養分の豊否は中庸である。障害程度の小さい物理的障害あり、増冠水をうける危険性が多少ある。地形は平坦である。

B 植生及び利用状況

一部耕地に利用されているが管理が粗放で収量は低い。大部分は原野のまゝとなつていて主として放牧地、野草の採草地となつている。

C 地方保全上の問題点

地下水位が高く過湿な土壤であるから明渠、暗渠排水を設置して土地の乾燥を計る必要がある。この外は川北統一1区に準ずるので参照されたい。

D 分布

標津郡標津町茶志骨

調査及び記載責任者 菊地晃二(北海道立中央農業試験場)

昭和41年3月31日

崎 無 異 統

(1) 土壤統概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ11cm内外、土性はLである。腐植含量11.3%、色は10YRで明度2彩度3である。小円礫あり、発達中度の細粒状構造、細孔あり、ち密度16で中、pH(H₂O)5.6、層界は判然である。

第2層は厚さ19cm内外、土性はSLである。腐植含量7.6%、色は10YRで明度4、彩度2である。礫なく発達弱度の粒状、細塊状構造あり、細小孔あり、ち密度20で中、pH(H₂O)5.6、下層との境界は漸変である。

第3層は厚さ28cm内外、土性はSLである。腐植を欠き、色は10YRで明度4、彩度3である。

半風化礫あり、発達弱度の細塊状構造、細小中孔あり、ち密度16で中、下層との境界は明瞭である。
第4層60cm以下は円礫層である。

代表的断面形態

(所在地) 標津郡標津町崎無異 試坑No.61

第1層	0~11cm	腐植に富む黒褐(10YR2/3)のL、小円礫あり、発達中程の粒状構造、細孔あり、ち密度16で中、pH(H ₂ O)5.6、層界判然。
第2層	11~32cm	腐植を含む、黄褐灰(10YR4/2)のSL、礫なく、発達弱度の粒状、細塊状構造、細小孔ありち密度20で中、pH(H ₂ O)5.6、層界漸変。
第3層	32~60cm	腐植を欠く灰黄褐(10YR4/3)のSL、小円半角礫あり、発達弱度の細塊状構造、細小、中孔あり、ち密度16で中、層界明瞭。
第4層	60cm~	円礫である。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	粒径組成 %				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
			粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0~11	7.3	10.5	46.7	31.7	11.1	L	69.3	2.3	6.56	0.50	1.3	11.3
2	11~32	7.2	14.4	59.3	19.2	7.1	SL	69.3	2.4	4.43	0.37	1.2	7.6
3	32~60	5.6	15.6	67.5	11.1	5.8	SL	85.5	2.4	-	-	-	-

層位	pH		置換酸度 Y ₁	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 %	磷酸吸収係数	有効態磷酸 mg/100g
	H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
	1	5.6			4.5	5.25	26.9			
2	5.6	4.5	4.50	32.3	0.69	0.68	0.42	7.6	2.257	tr
3	5.8	4.6	3.25	22.1	0.67	1.17	0.43	30.2	1.788	10.9

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する統としてはコウロン統、忠類統があるが堆積様式が異なるので本統と区分される。

A-3 母材 非固結水成岩

A-4 堆積様式 水積(河成堆積)

B 地形 平坦

C 気候

海洋の影響を強く受ける。夏季は冷涼でかつ盛夏海霧の襲来が多く、このため日照不足、温度の下降、湿度の上昇がもたらされる。冬期は積雪量少く、土壌が凍結して春季の農耕開始を遅延せしめる等農業上不利な気候下にある。

D 植生及び利用状況

耕地としての利用度は低く、管理は粗放であり、収量は低い。耕地には牧草、飼料作物、馬鈴薯が作付けられている。耕地以外は山林原野となつている。

E 農業上の留意すべき事項

面積が少なく、礫が出現するところもあるので耕地としての利用率は低い。地味は少々よい方なので耕地として利用すべきである。

F 分 布

標津郡標津町崎無異、忠類

調査及び記載責任者 菊地晃二（北海道立中央農業試験場）

昭和41年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土壌区名	簡略分級式
崎無異統一崎無異区	III fn II pwie

② 土壌区別説明

崎無異統一崎無異区

示性分級式(畑)

土壌生産力可能性等級	表効土の層の厚さ	表土の粘着性	耕転土の風乾土の硬さ	表土の乾燥性	透水性	保湿度	自然肥沃度	自固力	養分態	養分交換性	置換性	有効量	微量	酸化	障害	物理的障害	災害冠水の危険性	傾斜の危険度	傾斜	自傾	人為的傾斜	侵蝕	耐蝕性	耐風蝕性	
t d g p			w			f	n					i	a	s								e			
III I II I II 1 2 2 II 2 2 2 III 1 4 3 III 3 2 1 3 - 2 II 1 2 I 1 1 I 1 - - II 2 2 2																									
簡略分級式		III fn II pwie																							

A 土壌区の特徴

この土壌区は崎無異統に属する。表土の厚さは25cm以上で深い。有効土層は50~100cmでやや深い。土性は壤質であるが農具を使うに当つてわずかに抵抗がある。過湿のみそれがある。保肥力大、固定力大で自然肥沃度は低い。石灰、リン酸が少なく苦土、加里は多い、酸度は中である。豊分は少ない。障害程度の小さい物理的障害ある。侵蝕のおそれはある。

B 植生及び利用状況

一般に耕地としての利用度は低くまた収量は管理が不充分のために比較的低い。耕地以外は大部分山林、原野となつている。

C 地力保全上の問題点

面積は少く、礫が出現するところもあるので耕地としての利用率は低い。地味は少々よい方なので耕地として利用すべきである。耕地として利用出来ないところは牧草地あるいは牧野として利用すべきである。

D 分 布

標津郡標津町崎無異、忠類

調査及び記載責任者 菊地晃二（北海道立中央農業試験場）

昭和41年3月31日

忠 類 統

(1) 土壤統概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ12cm内外、土性はLである。腐植含量16.8%、色は7.5YRで彩度3、明度2である。礫なく発達弱度の細粒状、粒状構造あり、細孔あり、ち密度1.7で中、pH(H₂O)6.0、下層との境界は判然である。

第2層は厚さ30cm内外、土性はLである。腐植含量15.3%、色は7.5YRで彩度2、明度2である。礫なく発達中度の細粒状、粒状構造あり、細孔あり、ち密度1.9で中、pH(H₂O)5.9、下層との境界は漸変である。

第3層は厚さ18cm内外、土性はSLである。腐植含量9.4%、色は10YRで明度3、彩度3である。礫なく発達弱度の細塊状構造あり、細孔含む、小孔あり、ち密度1.8で中、pH(H₂O)6.0、層界は漸変である。

第4層は厚さ12cm内外、土性はSLである。腐植を欠き、色は10YRで彩度4、明度5である。小円礫あり、発達弱度の細塊状構造あり、細孔含む、小孔あり、ち密度1.9で中、pH(H₂O)6.2、下層との境界は不規則明瞭である。

代表的断面形態

(所在地) 標津郡標津町忠類 試坑No.66

第1層	0~12cm	腐植に富む黒褐(7.5YR 2/3)のL、発達弱度の粒状構造、細孔あり、ち密度1.7で中、pH(H ₂ O)6.0、層界判然。
第2層	12~42cm	腐植に富む黒褐(7.5YR 2/2)のL、発達中度の粒状構造、細孔あり、ち密度1.9で中、pH(H ₂ O)5.9、層界漸変。
第3層	42~60cm	腐植を含む暗褐(10YR 5/3)のSL、発達弱度の細塊状構造、細小孔あり、ち密度1.8で中、pH(H ₂ O)6.0、層界漸変。
第4層	60~72cm	腐植を欠く灰黄褐(10YR 5/4)のSL、小円礫あり、発達弱度の細塊状構造、細小孔あり、ち密度1.9で中、pH(H ₂ O)6.2、層界不規則明瞭。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	粒径組成 %				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
			粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0-12	5.9	3.3	51.1	32.7	12.9	L	66.2	2.0	9.72	0.67	15	16.8
2	12-42	8.0	8.7	51.5	31.5	8.3	L	72.0	2.1	8.90	0.56	15	15.3
3	42-60	9.0	14.3	59.1	22.6	4.0	SL	59.4	2.3	5.46	0.38	14	9.4
4	60-72	6.3	14.1	66.3	16.9	2.7	SL	73.2	2.4	-	-	-	-

層位	pH		置換酸度 Y ₁	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 %	磷酸吸収係数	有効態磷酸 mg/100g
	H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	6.0	5.0	0.50	32.6	14.88	2.37	0.89	45.6	1.737	4.6
2	5.9	4.8	1.25	38.6	6.91	2.07	0.57	18.2	2.517	tr
3	6.0	4.9	1.00	29.5	2.97	2.10	1.03	9.9	1.961	0.4
4	6.2	5.2	0.25	15.6	1.87	1.18	0.83	12.6	2.026	tr

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する統としては古多糠統、崎無異統があるが堆積様式が異なるので区分される。

A-3 母材 非固結火成岩 / 非固結水成岩

A-4 堆積様式 風積 / 水積

B 地形、平坦

C 気候

海洋の影響を強く受ける。夏季は冷涼でかつ盛夏海霧の襲来が多く、このため日照不足、温度の下降、湿度の上昇もたらされる。冬期は積雪量少く、土壌が凍結して春季の農耕開始を遅延せしめる等農業上不利な気候下にある。

D 植生及び利用状況

耕地としての利用度は低く、管理は粗放であり、収量は低い。耕地には牧草、飼料作物、馬鈴薯が作付けされている。耕地以外は放牧地、山林、原野となつている。

E 農業上の留意事項

作土は火山灰土で地味はやせているが下層土は沖積土で肥沃であるが深すぎるので実際に利用することは困難である。従つて現在に於いては川北統-1区に準ずるのでそれを参照されたい。

F 分布

標津郡標津町忠類

調査及び記載責任者 菊地晃二（北海道立中央農業試験場）

昭和41年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土壌区名	簡略分級式
忠類統-忠類区	II dw fe

② 土壌区別説明

忠類統 — 忠類区

示性分級式(畑)

土壌生成可能性等級	表土の厚さ	表土の層	耕転の易	表土の粘着性	表土の乾燥性	土透水性	自保湿度	自保肥力	自固保肥力	養分交換性	位置の豊富	微酸状態	障礙要素	物理的障害の有無	災害危険性	傾斜	傾斜	人為的侵蝕	風蝕	耐蝕性												
t	d	g	p		w		f		n			-		i	a	s			e													
II	I	I	I	1	2	1	II	2	2	II	1	3	2	I	1	1	1	2	-	I	1	1	I	1	1	I	1	--	II	2	1	2

簡略分級式 II dw fe

A 土壤区の特徴

この土壤区は忠類統に属する。表土の厚さは25cmで深い、有効土層は50~100cmでやゝ深い。土性は壤質で農具の使用に当つて支障はない。過湿のおそれがある。保肥力大、固定力中、自然肥沃度は中庸である。石灰、苦土、加里多、りん酸は中、酸度は弱く養分の豊否は多い。特殊な障害性はない地形は平坦である。

B 植生及び利用状況

耕地としての利用度は低く、管理は粗放であり収量は低い。耕地には牧草、飼料作物、馬鈴薯が作付けされている。耕地以外は放牧地、山林、原野となつている。

C 地力保全上の問題点

川北統一1区に準ずるので参照されたい。

D 分 布

標津郡標津町忠類

調査及び記載責任者 菊地晃二(北海道立中央農業試験場)

昭和41年3月31日

伊 茶 仁 統

(1) 土壤統概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ9cm内外、土性はOLである。腐植含量は17.9%、色は7.5YRで彩度3、明度3である。礫なく発達中度の細粒状、粒状構造あり、孔隙なし、ち密度10で疎、pH(H₂O)5.8、下層との境界は判然である。

第2層は厚さ24cm内外、土性はSiLである。腐植含量6.5%、色は10YRで彩度3、明度4である。礫なく発達弱度の細塊状構造あり細孔あり、ち密度15で中、pH(H₂O)6.0、下層との境界は漸変である。

第3層は厚さ25cm内外、土性はSである。腐植を欠き、色は2.5Yで彩度2、明度4である。単粒状構造である。黄褐の斑紋あり、細孔、小孔あり、ち密度18で中、pH(H₂O)6.1、下層との層界は漸変である。

第4層は60cm以下で土性はSである。色は2.5Yで彩度2、明度6である。礫なく単粒状構造あり、黄褐の斑紋ありち密度15で中である。

代 表 的 断 面 形 態

(所在地)標津郡標津町伊茶仁 試坑No.69

第 1 層	0~9cm	腐植に富む暗褐(7.5YR 3/3)のOL、礫なく発達中度の粒状構造、ち密度10で疎、pH(H ₂ O)5.8、層界判然。
第 2 層	9~35cm	腐植を含む灰黄褐(10YR 4/3)のSL、礫なく発達弱度の細塊状構造、細孔ありち密度15で中、pH(H ₂ O)6.0、層界漸変。
第 3 層	35~60cm	腐植を欠く黄褐灰(2.5Y 4/2)のS、礫なく単粒状構、細小孔あり、黄褐の斑紋あり、ち密度18で中、pH(H ₂ O)6.1、層界漸変。
第 4 層	60cm~	腐植を欠く、黄褐灰(2.5Y 6/2)のS、礫なく単粒状構造、黄褐の斑紋あり、ち密15で中である。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	粒径組成 %				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
			粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0-9	6.3	0.9	35.5	43.2	20.4	CL	63.7	2.5	10.39	0.81	13	17.9
2	9-35	5.2	1.5	40.5	47.2	10.8	SiL	102.7	2.5	3.77	0.36	10	6.5
3	35-60	3.0	11.6	88.1	0.2	0.1	S	-	-	-	-	-	-

層位	pH		置換酸度 Y ₁	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 %	磷酸吸収係数	有効態磷酸 mg/100g
	H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	5.8	4.9	0.75	39.1	19.85	4.13	1.54	50.7	1.477	4.9
2	6.0	4.7	1.50	17.4	3.02	1.17	0.26	17.4	1.703	1.5
3	6.1	4.9	0.75	4.4	0.16	0.97	0.73	3.6	683	4.8

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する統としては川北統、標津原野統があるが母材、堆積様式が異なるので本統と区別される。

A-3 母材 非固結水成岩

A-4 堆積様式 水積（河成堆積）

B 地形 平坦

C 気候

海洋の影響を強く受け、夏季は冷涼でかつ盛夏海霧の襲来が多く、このため日照不足、温度の下降、湿度の上昇がもたらされる。

冬季は積雪量少く、土壌が凍結して春季の農耕開始を遅延せしめる等農業上不利な気候下にある。

D 植生及び利用状況

大部分は原野のまゝになつてゐるが、一部は耕地に利用され、えん麦、牧草が作付けられている。管理状況はあまりよくなく、排水不良のため収量は低い。

E 農業上の留意事項

過湿なので明渠、暗渠排水を設置して排水を計ることが最も必要である。地味は比較的よいから耕作に利用すべきである。

F 分布

標津郡標津町標津川流域、伊茶仁

調査及び記載責任者 菊地晃二（北海道立中央農業試験場）

昭和41年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覽

土壌区名	簡略分級式
伊茶仁統-伊茶仁区	IIIwa eIIpn

② 土壌区別説明

伊茶仁統 — 伊茶仁区

示性分級式 (畑)

土表有表耕	(表表表)	(土透保)	(自保固)	(養置換)	(有微酸)	(障有物)	(災增地)	(傾自傾)	(侵人侵)	(耐耐)
壤生土土	効土土	表土の	然	層の	効	害物理	冠すべ	然斜	為	水風
産力可	の層の	の風乾	水水潤	肥定塩	燐	質障	の危危	傾方	傾	蝕蝕
能性厚	の含難	土着	沃	状豊	要	有書	險險	斜向斜	蝕蝕	性性
等級	ささ量易	性性	性性度	力力態	否	性	性	斜	蝕	性性
	t d g p	w	f	n		i	a	s	e	
Ⅲ	I I I II	2 2 2	III 2 2 3	I 1 2 1	II 1 1 1	2 - 2	I 1 1	III 3 1	I 1 - -	III 1 3 1
簡略分級式	Ⅲ w a e II p n									

A 土壤区の特徴

この土壤区は伊茶仁統に属する。表土の厚さは25cm以上、有効土層は1m以上で深い。表土の土性は粘質で農具を使うに当つてわずかに抵抗がある。過湿のおそれが多い。保肥力大、固定力小、自然肥沃度は良好である。石灰、苦土、加里は多く、りん酸は中、酸度は中で養分は中庸である。増冠水を受ける危険性がかなり大きい。地形は平坦である。

B 植生及び利用状況

大部分は原野のまゝになつているが、一部は耕地に利用され、えん麦、牧草が作付けられている。管理状況はあまりよくなく、排水不良のため収量は低い。

C 地力保全上の問題点

過湿を呈するので明渠、暗渠排水を計ることが最も必要である。地味は比較的よいから耕作に利用すべきである。

D 分布

標津郡標津町標津川流域、伊茶仁

調査及び記載責任者 菊地晃二(北海道立中央農業試験場)

昭和41年3月31日

東 茶 志 骨

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ14cm内外、主としてヨシ、スゲを主材とする分解少々不良な泥炭である。色はYRで彩度2、明度3である。火山灰の薄層はさむ、PH(H₂O)5.3、下層との境界は直線明瞭である。

第2層は厚さ40cm内外で、主としてヨシ、スゲを主材とする分解良な泥炭である。色はYRで彩度2、明度2である。pH(H₂O)5.4、下層との境界は明瞭である。

第3層は厚さ30cm内外で、ヨシを主体とする分解不良な泥炭である。色はYRで彩度1、明度2である。火山灰の薄層はさむ。pH(H₂O)5.2、下層との境界は判然である。

代表的断面形態

(所在地) 標津郡標津町茶志骨 試坑 № 38

第 1 層	0~14 cm	暗褐 (7.5 YR 3/3) ヨシ、スゲを主材とした分解稍々不良な泥炭、pH (H ₂ O) 5.3、層界明瞭。
第 2 層	14~50 cm	黒褐 (7.5 YR 2/2) ヨシ、スゲを主材とした分解良な泥炭、pH (H ₂ O) 5.4、層界明瞭。
第 3 層	50 cm~	黒 (10 YR 2/1) ヨシを主体とする分解不良な泥炭、pH (H ₂ O) 5.2、層界判然。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	pH		置換酸度 Y ₁	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 %	磷酸吸収係数	有効態磷酸 mg/100g
			H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	0~14	6.4	5.3	4.4	5.00	-	5.92	3.67	0.12	-	1,640	0.7
2	14~50	8.9	5.4	4.4	4.50	-	9.44	3.14	0.10	-	2,284	0.4
3	50~	12.7	5.2	4.4	5.50	-	14.19	5.62	0.21	-	2,675	tr

A-2 他の土壌統との関係

本当に隣接する統としては川北統、茶志骨統があるが何れも堆積様式が異なるので本統と区別される。

A~3 母材、ヨシ、ハンの木を主材とする低位泥炭

A~4 堆積様式 集積

B 地 形 平坦

C 気 候

海洋の影きよを強く受ける。夏季は冷涼で、かつ盛夏海霧の襲来が来く、このため日照不足、温度の下降、湿度の上昇がもたらされる。冬季は積雪量少く、土壌が凍結し、春季の農耕開始を遅延せしめる等農業上不利な気候下にある。

D 植生及び利用状況

一部耕地に利用されているが管理は粗放で収量は低い。大部分は原野のままとなっている。一部放牧地、採草地として利用されている。

E 農業上の留意事項

過湿を呈する泥炭地であるから明渠、暗渠排水を設置して土地の乾燥を図ることが最も必要である。次に粘土の客入、酸性矯正が必量である。

F 分 布

標津郡標津町茶志骨

調査及び記載責任者 菊地晃二 (北海道立中央農業試験場)

昭和41年3月31日

(1) 土壌統の概説

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ22cm内外、主としてスゲ、ヤチヤナギからなる分解不良な泥炭である。色はYRで彩度3、明度4である。pH(H₂O)4.8、下層との境界は明瞭である。

第2層は厚さ50内外、主としてホムイスゲ、ヤチヤナギ、ツルコケモモからなる分解不良な泥炭である。色はYRで彩度4、明度4である。火山灰の薄層をはさむ、pH(H₂O)は6.4、下層との境界は明瞭である。

第3層は厚さ25cm内外でヨシ、スゲを主体とした分解不良な泥炭である。色はYRで彩度2、明度3である。火山灰の薄層をはさむ。pH(H₂O)5.0、下層との境界は明瞭である。

代表的断面の形態

(所在地) 標津郡標津町 試坑No70

第1層	0~22cm	褐(7.5/YR4/3) スゲ、ヤチヤナギ、からなる泥炭、分解不良pH(H ₂ O)4.8、層界明瞭。
第2層	22~73cm	褐(7.5YR4/4) ホムイスゲ、ヤチヤナギ、ツルコケモモからなる泥炭、分解不良、pH(H ₂ O)4.6、層界明瞭。
第3層	73~100cm	黒褐(7.5YR3/2) ヨシ、スゲを主材とする泥炭、分解稍不良pH(H ₂ O)5.0、層界明瞭。

代表的断面の分析成績

層位	彩取部 位 cm	水分 %	pH		置換酸 度Y ₁	塩基置 容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽 和度%	磷酸吸 収係数	有効態磷 酸 mg/100g
			H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	0~22	6.9	4.8	4.0	18.00	-	1.44	1.02	0.32	-	1,220	3.7
2	22~22	9.2	4.6	3.7	21.50	-	5.89	1.89	0.08	-	1,110	1.3
3	73~100	9.1	5.0	4.1	12.50	-	4.20	0.84	0.04	-	1,690	tr

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する統として川北統、ウラツブ統、伊茶仁統等があるが堆積様式が異なるので本統と区分される。

A-3 母材、スゲ、ヤチヤナギを主材とする。中間泥炭

A-4 堆積様式 集積

B 地形 平坦地

C 気候

海洋の影響を強く受ける。夏季は冷涼でかつ盛夏海霧の襲来が多く、このため日照不足、温度の下降、温度の上昇がもたらされる。冬期は積雪量少く、土壌が凍結して春季の農耕開始を遅延せしめる等農業上不利な気候下にある。

D 植生及び利用状況

大部分が原野のままになっている。一部放牧地となっているが管理が粗放である。

E 農業上の留意事項

過湿を呈する泥炭土であるから幹線大明渠を設置して土地の乾燥することが最も必要である。次に

粘土の客入、酸性矯正が必要である。

F 分 布

標津郡標津町

調査及び記載責任者

菊地晃二 (北海道立中央農業試験場)

昭和41年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覽

土 壌 区 名	簡 略 分 級 式
標津原野統—標津原野区	NwIII naeII f

② 土壌区別説明

標 津 原 野 統 — 標 津 原 野 区

示性分級式 (畑)

土 壤 生 産 力 の 可 能 性 等 級	表 効 土 層 の 厚 さ	表 土 層 の 容 易 量	耕 耘 の 粘 着 性	(表 土 の 風 乾 硬 さ)	(土 地 の 水 潤 度)	(自 然 肥 沃 度)	(固 定 力)	(養 分 の 豊 否)	(置 換 性)	(有 機 質 の 量)	(酸 性 障 害 の 有 無)	(災 害 の 危 險 性)	(傾 斜 の 危 險 性)	(傾 斜 の 危 險 性)	(侵 蝕 の 危 險 性)	(耐 風 耐 水 耐 蝕 性)																				
t	i	g	D		w		f		n		i		a		s		e																			
Ⅲ	I	I	I	I	1	1	1	Ⅳ	1	3	4	Ⅱ	1	2	3	Ⅲ	5	2	1	2	-	3	I	1	1	Ⅲ	3	1	I	1	-	-	Ⅲ	2	3	1
簡略分級式		NwIII naeII f																																		

A 土壌区の特徴

この土壌区は標津原野統に属する。表土の厚さは25cm以上、有効土層は1m以上で深い。中間泥炭からなり排水不良である。保肥力大、固定力小で自然肥沃度は中庸である。石灰少なく、苦土、りん酸中、加里は多い。酸度は高い。養分の豊否は少い。増冠水をうける危険性がかなり大きい。地形は平坦である。

B 植生及び利用状況

大部分が原野のままになっている。一部放牧地となっているが管理が粗放である。

C 地力保全上の問題点

過湿を呈する泥炭土であるから幹線明渠を設置して土地の乾燥を計ることが最も必要である。次に粘土の客入、酸性矯正が必要である。

D 分 布

標津郡標津町

調査及び記載責任者

菊地晃二 (北海道立中央農業試験場)

ウ ラ ツ プ 統

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ15cmで、腐植含量7~8%、土性はLである。色は10YR~2.5Yで彩度4~6、明度3~5である。礫は存在せず、発達弱度の細粒状構造を呈し、ち密度1.4前後で疎である。pH(H₂O)6.1。下層との境界は直線明瞭である。

第2層は厚さ10cm前後、腐植含量5~7%土性はL~SLである。色は10YR~2.5Yで彩度4~6、明度4~5である。礫は存在しない。発達弱度の粒状と細塊状の複合構造を呈するものが多い。細孔を含む。ち密度1.6前後で疎、下層との境界は波状漸変である。

第3層は厚さ15~20cmで、腐植を含み、土性はSLが主である。色は10YR~2.5Yで彩度1~2、明度3~5である。風化細小円礫を含み、発達弱度の粒状構造を呈する。細孔を含み、ち密度1.6前後で疎である。下層との境界は波状少々明瞭である。

第4層は厚さ22~35cmで、腐植含量2%以下、土性はSLである。礫は存在しない。単粒構造を呈し、ち密度1.7前後で疎である。

下層との境界は不規則漸変する。

第5層は地表下概ね65cmで、未風化円礫層である。

代 表 的 断 面 型 態

(所在地) 標津郡標津町字川北 試坑No.14

第1層	0~15cm	腐植に頗る富む暗褐色(10YR 3/4)のCL、礫なく、発達弱度の細粒状構造、ち密度1.4で疎、pH(H ₂ O)6.1、調査時の湿り湿、層界直線明瞭。
第2層	15~28cm	腐植に富む黄褐色(2.5Y 4/2)のL、礫なく、発達弱度の粒状と細塊状の複合構造、細孔に富む、ち密度1.6で疎、調査時の湿り湿、層界波状少々明瞭。
第3層	28~43cm	腐植を含む黄褐色(2.4Y 5/2)のSL、半風化細小円礫を含み、発達弱度の粒状構造、細孔を含む、ち密度1.6で疎、調査時の湿り湿、層界波状少々明瞭。
第4層	43~65cm	腐植を欠く黄褐色(2.5Y 5/4)のSL、礫なく、単粒構造、ち密度1.7で疎、調査時の湿り湿、層界不規則漸変。
第5層	65cm~	未風化円礫層

代 表 的 断 面 の 分 析 成 績

層位	深さ cm	水分 %	粒径組成%				土性	現地容積重 ρ	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率
			粗砂	細砂	シルト	粘土						
1	0~15	6.1	1.8	34.9	43.9	19.4	CL	-	-	4.51	0.43	1.0

腐植 %	pH		置換酸度 Y ₁	置換容量 me/100g	置換容量 me/100g			石灰飽和度 %	磷酸吸収係数	有効態 磷酸 mg/100g
	H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
7.8	6.1	4.7	1.25	23.7	11.4	1.6	0.4	48.1	1.110	3.1

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する川北統とは母材、堆積様式が異なるので区別される。

A-3 母材 非固結水成岩

A-4 堆積様式 水積（河成堆積）

B 地形

標高20～40mの小河川の流域に分布する平坦な低地である。

C 気候

海洋の影響を強く受け、夏季は冷涼でかつ盛夏海霧の襲来が多く、このため日照不足、温度の下降、湿度の上昇がもたらされる。

冬季は積雪量少く、土壌が凍結して春季の農耕開始を遅延せしめる等農業上不利な気候下にある。

D 植生及び利用状況

耕地としての利用度は低く、管理は粗放であり、収量は低い。耕地には牧草、飼料作物、馬鈴薯が作付されている。耕地以外は山林原野となつている。

E 農業上留意すべき事項

面積が少なく、土層の状態が乱雑で、一部には排水不良或は地表から礫の出現するところもあるため耕地としての利用率は低い。地表に礫の出現がなく、排水の比較的良好ところは当地区内では地味が稍々よい方なので耕地に利用すべきである。

その他は牧草地或は牧野として利用することが好ましい。

F 分布

標津郡標津町、川北

調査及び記載責任者 高尾欽弥（北海道立中央農業試験場）

昭和39年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覽

土 壤 区 名	簡 略 分 級 式
ウラップ統-ウラップ区	III d p w f n i

② 土壌区別説明

ウラップ統-ウラップ区

示性分級式

土 壤	表 土	表 土	表 土	土 地	透 湿	自 然	保 固	土 質	養 分	有 酸	障 害	傾 斜	傾 斜	侵 蝕	耐 耐
効 土	土 耘	土 土	土 土	地	然	然	層 分	置 換	性 態	学 理	的 的	然 然	斜 為	水 風	耐 耐
産 力	土 層	の 粘	の 乾	の 水	潤 肥	肥 定	塩 基	の 石	苦 加	害 障	障 障	害 害	傾 方	傾 方	蝕 蝕
可 能	厚 深	含 難	土 着	乾 硬	沃	状 豊	量	否	性	性	性	斜 向	斜 向	蝕 蝕	性 性
等 級	さ 量	易	性 性	性 度	力 力	態 量	" "	" "	" "	度	性 性	斜 向	斜 向	蝕 蝕	性 性
	t d g p		w f	n	i	s									
	III-I-II	I II	2 2 1	II 1 2	II 1 2	II 1 2	II 1 1	2 3 1	II 1 2	I 1 2	I 1	- -	- -	I 1 1 1	
	簡略分級式														
	II d p w f n i														

A 土壌区の特徴

この土壌区はウラップ統に属する。表土の原さは15～30cmで中庸で、有効土は60～100cmである。地表から大中円礫の出現するところがあり、土層は乱雑で一定しない、又局部的に排水不良のところがある。

表土は中粒質で、粘着性弱く農具の使用にはさ程不便ではない。しかし地表に大中円礫の出現するところは農耕に支障を来す。

保肥力大、磷酸固定力中庸で、塩基状態も中庸である。

養肥分は磷酸に不足しているが、その他は比較的ある。

地表から大中円礫の出現するところは物理障害となり、耕作不可能である。

B 植生及び利用状況

一般に耕地としての利用度は低く、耕地は管理不十分のため収量は比較的低い。

耕地以外の大部分の面積は山林、原野となつている。

C 地力保全上の問題点

一般に土層の状態が乱雑で一定せず、一部には地表から大中円礫の出現するところ、或は排水不良なところがあるため耕地として利用度は低い。土層状態の比較的良好なところは当地区内では地味が比較的良好から耕作に利用すべきであるが、その外は牧草地或は牧野として利用する方がよい。

D 分布

標津郡標津町川北

調査及び記載責任者 高尾欽弥（北海道立中央農業試験場）

昭和39年3月31日

3 保全対策区分及び説明

1) 保全対策地区の説明

土壌の性状及び主要な保全対策を検討の上、次の5保全対策地区を設定した。

保全対策地区名	該 区	面積 (ha)	主 な 特 徴	重要な保全対策
川 北	川北-1 川北-2 古多糠 コウロン	1,872	平坦～緩傾斜地 地力が低く瘠薄化し易い 低位生産永年牧草地が存在する。	施肥改善 塩基の補給 永年牧草地の草生改良、更新。
糸 櫛 別	糸 櫛 別 茶 志 骨	305	未利用地が多い。 平坦～緩傾斜地 地力が低く瘠薄化し易い 未利用地が多い。	簡易牧野の造成 深耕 明渠、暗渠排水 施肥改善 永年牧草地の草生改良、更新。
東 茶 志 骨	東 茶 志 骨 標 津 原 野	484	平坦 排水不良。 酸性を呈する。 未利用地が大部分である	簡易牧草の造成 幹線大明渠 客土 酸性矯正 簡易牧野の造成

保全対策地区名	該当土壌区	面積 (ha)	主な特徴	主要な保全対策
伊茶仁	伊茶仁	27	平坦 排水不良 酸性を呈する 未利用地が多い	明渠、暗渠排水 酸性矯正
ウラツブ	ウラツブ 崎無異 忠類	52	平坦 土層乱雑で地表から大中 小の円礫の出現するところがある。 未利用地が多い。	牧草地、牧野として利用 除 礫 施肥の合理化

2) 保全対策地区別説明

<川北保全対策地区>

(1) 分布状況

都市町村名	畑面積 (ha)	備考(該当土壌区)
標津郡標津町	1,872	川北 統-1 区 川北 統-2 区 古多 糠統-古多 糠区

(2) 保全対策地区の特徴と地力保全上の問題点

① 特徴と問題点

本調査地区の大部分を占め、地形は略々平坦であるが、春季融雪時僅かの傾斜に沿って融雪水が流れ、細流侵蝕が発生するが、その被害は軽微である。

全層火山噴出物の累層から構成されており、特に表層は比較的新しい火山灰であるため地力は低い。又水分を多量に含んでいる腐朽浮石礫が存在し、低温湿潤な気候と相まって土壌は少々湿性を呈する。

一般畑地の中には低位生産の永年牧草地が存在し、未利用地等も多い。経年畑は窒素、加里等の可給態養分が低下し、新墾地では極端な磷酸欠乏を来している。又、多量の腐植を含有しているが、有効態のものは少く、有効態のもの消滅が比較的短期間である等の欠点を有する。

② 営農の方向

低温多湿な気候条件のため一般畑作物の生育は不良であり、乳牛を主体にした主畜経営が推進されている。しかしながら経済的安定規模の確立されていない農家も数多く存在し、これらを急速に安定規模で到達せしむることは最も重要なことと考えられる。

これには基盤となる良好な飼料の増産確保が必要であり、低位生産永年牧草地の草生改良、又は更新による草量増加。採草量の極めて低い放牧地、原野の簡易牧野造成による利用度の高揚が望まれる。

経年畑は磷酸よりも加里に不足し、又窒素の肥効も極めて高いから、これを中心とした施肥が望ましく、牧草地に対する家畜尿撒布は今後積極的に実施することが望ましい。

3) 地力保全対策

対策の種類	対象地及び対象面積	実施方法	対策資材及び機械器具の種類、型式、数量
施肥改善	川北-1 川北-1 古多糠 コウロシ 1,872ha	加里、窒素の増肥 牧草に対し加里、窒素を中心とした追肥の実施及び家畜尿撒布。	指導の徹底
永年牧草地の草生改良	" "	加里、窒素の増肥、更新。	指導の徹底。 トラクター導入助成。
牧野の利用度高揚	" "	簡易牧野の造成。	指導の徹底並びに助成。

<糸嶺別保全対策地区>

(1) 分布状況

郡市町村名	畑面積 (ha)	備考(該当土壌区)
標津郡標津町	305	糸嶺別統一糸嶺別区 茶志骨統一茶志骨区

(2) 保全対策地区の特徴と地力保全上の問題点

① 特徴と問題点

本調査地区の西部の山麓に分布し、緩傾斜を有し、土壌は耐侵蝕性に乏しいため、春季融雪融凍時水蝕を受ける。

土壌は全層火山噴出物の累層からなり、特に表層に比較的新しい火山灰であるため地力は低い。又水分を多量に含んでいる腐朽浮石礫が存在し、低温湿潤な気候と相まって土壌は少々湿性を呈するが、斜面からの伏流水の影響が加わってしばしば過湿となる。

一般畑地は加里、窒素等の可給態養分が低く、又低位生産な永年牧草地が存在し、未利用地も多い。

② 営農の方向

川北保全対策と全く同じ営農方向に推進すべきである。即ち経営基盤となる良質飼料の増産確保のため、一般牧草畑の施肥、尿撒布による草生増加、永年牧草の草生改良、更新、更には放牧地、原野の簡易牧野造成による採草、利用度の高揚等があげられる。

土壌はしばしば過湿となるから明渠排水或は暗渠排水の設置が必要であり、水蝕防止のための緑作帯設置、牧草と畑一般作物の作付合理化が必要である。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対象地及び対象面積	実施方法	対策資材及び機械器具の種類、型式、数量
保全耕作	糸櫛別 茶志骨 305ha	緑作帯の設置 作付の合理化	指導
排水	"	明渠、暗渠排水	指導、工事費助成
施肥改善	"	加里、窒素の増加 牧草地の追肥は加里、窒素を中心とし、家畜尿撒布を実施することが望ましい	尿撒布機の導入助成 尿溜の建設助成
永年牧草地の草生改良	"	永年牧草地の施肥、更新	指導の徹底 トラクター導入助成
牧野の利用度高揚	"	放牧地、原野の簡易牧野造成	指導の徹底ならびに造成費の助成

<東茶志骨保全対策地区>

(1) 分布状況

郡市町村名	畑面積 (ha)	備考 (該当土壌区)
標津郡標津町	484	東茶志骨統一東茶志骨区 標津原野統一標津原野区

(2) 保全対策地区の特徴と地力保全上の問題点

① 特徴と問題点

低位、中位泥炭からなる過湿地である。従つて耕地としての利用面積は少くほとんどが原野となつている。強酸性でもある。

② 営農の方向

幹線大明渠、暗渠を設置して排水を計ることが最も必要である。これらの施工については当初から計画的に実施することが望ましい。次に粘土の客入、酸性矯正が必要である。本地帯の気象的条件からして牧草栽培を中心とした主畜経営が好ましいものと思われる。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対象地及び対象面積	実施方法	対策資材及び機械器具の種類、型式、数量
排水	東茶志骨 標津原野 484ha	幹線大明渠排水 明渠、暗渠排水	工事費補助
谷地方主除去	” ”	機械力使用	レーキトーチ貸貸補助
酸性矯正	” ”	炭カル施用	炭カル(450~600Kg/ 10a) ライムソー導入助成
客土	” ”	粘土の客入	

<伊茶仁保全対策地区>

(1) 分布状況

郡市町村名	畑面積 (ha)	備考(該当土壌区)
標津郡標津町	27	伊茶仁統一伊茶仁区

(2) 保全対策地区の特徴と問題点

① 特徴と問題点

標津川流域に分布する排水不良な沖積地である。土壌は酸性を呈している。排水不良なため耕地としての利用面積は少く原野としてのこつているのが大半である。

② 営農の方向

分布面積は少く、その利用度は低いようである。排水溝の設置、酸性矯正等耕地化にはかなりの資金と働力が必要であるから、経済効果の検討が必要であると思われる。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対象地及び対象面積	実施方法	対策資材及び機械器具の種類、型式、数量
排水	伊茶仁 27ha	明渠、暗渠排水	工事費の補助
酸性矯正	” ”	炭カルの施用	

<ウラップ保全対策地区>

(1) 分布状況

郡市町村名	畑面積 (ha)	備考(該当土壌区)
標津郡標津町	52	ウラツブ統一ウラツブ区 崎無異統一崎無異区 忠類統一忠類区

(2) 保全対策地区の特徴と地力保全上の問題点

① 特徴と問題点

ウラツブ川、忠類川、崎無異川流域に小面積に分布する。土層の状態は乱雑で石礫の浅いところあるいは地表に大中小円礫が存在するところがありその利用度は一般に低い。

② 営農の方向

石礫が浅いか、地表から大中小の円礫が存在するところや排水不良地は牧草を作付して採草地、放牧に利用する方が得策かと思われる。

石礫の浅いところは地味が少々良好なので耕地として利用することが好ましい。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対象地及び対象面積	実施方法	対策資材及び機械器具の種類、型式、数量
耕地は施肥の合理化	ウラツブ 崎無異 忠類 52ha	加里、窒素の増肥	指導
牧草栽培	” ”	耕作不能地は牧草を作付して採草地あるいは放牧に利用	
除 礫	ウラツブ 崎無異 30ha		

(2) 土壤分析成績

保全対策区	土壌区	地点番号	層位	深さ cm	理 学 性										化 学 性																
					風乾細土中		細土無機物中					土性	現地における理学性 100CC容中					pH		置換酸度 Y ₁	有機物			置換容量 ME/100g	置換性塩基 mg/100g			石灰飽和度 %	磷酸吸収係数	有効態磷酸 mg/100g	
					水分%	腐植%	粗砂%	細砂%	砂合計%	シルト%	粘土%		容積重g	固相容積CC	水分容積CC	空気容積CC	孔隙率%	H ₂ O	KCl		T-C %	T-N %	C/N		CaO	MgO	K ₂ O				
					分	植	砂	砂	計	ト	土	重	積	積	積	率															
川	川北1	53	1	0~12	6.2	13.4	5.1	3.98	4.49	4.15	1.36	L	553	243	45.7	30.0	75.7	5.6	4.8	2.00	7.75	0.51	15	188	109.4	1.71	6.4	21.0	1,730	tr	
			2	12~15	5.9	13.3	6.0	4.14	4.74	4.10	1.15	L	556	237	55.4	20.9	76.3	5.7	4.9	1.75	5.9	0.51	10	18.0	115.0	2.22	4.5	23.0	2,078	tr	
			3	15~18	8.7	11.3	11.4	3.48	4.62	4.32	10.6	L						5.6	4.9	1.00	7.18	0.48	15	21.7	106.6	1.81	3.9	17.7	-	-	
			4	18~25	10.9	15.1	28.5	38.1	6.66	3.18	1.6	SL	460	183	46.1	35.6	81.7	5.7	4.9	1.00	8.73	0.52	17	12.5	123.4	1.41	2.9	35.1	-	-	
			5	25~32	7.7	5.9	35.3	4.96	8.49	1.47	0.4	SL						6.1	5.2	0.25	3.44	0.34	10	12.8	61.7	10.1	2.5	10.1	-	-	
			6	32~38	12.0	1.74	1.28	5.11	6.39	2.97	6.5	L	47.2	20.3	55.0	2.47	7.97	6.1	5.1	0.50	10.10	0.53	19	37.4	173.8	1.81	3.5	16.7	-	-	
			7	38~53	11.7	13.9	9.8	6.39	7.37	2.61	0.1	SL						6.3	5.3	0.25	8.24	0.50	16	30.1	137.4	2.82	4.1	16.2	-	-	
	北	川北2	44	1	0~15	6.0	15.5	2.1	4.58	4.79	4.26	9.5	L	6.71	30.7	57.3	12.0	6.93	5.7	4.7	2.25	8.97	0.67	13	24.7	238.5	2.22	7.4	34.5	1,309	4.8
				2	15~18	5.9	12.6	2.9	4.64	4.93	3.74	1.32	L	61.8	26.1	47.7	26.2	7.39	5.8	4.7	3.25	7.33	0.50	15	19.0	103.7	1.21	3.8	1.96	1,979	tr
				3	18~23	6.4	11.9	4.2	4.95	5.37	3.76	8.6	L						5.9	4.7	3.75	6.90	0.44	16	19.7	75.7	1.21	2.1	13.6	-	-
				4	23~35	8.0	13.8	8.7	4.65	5.52	3.75	7.2	L	48.7	20.5	49.0	30.5	7.95	5.8	4.8	3.25	8.00	0.54	15	27.6	100.9	8.1	3.9	13.0	-	-
				5	35~43	9.7	12.7	20.2	5.26	7.28	26.7	0.5	SL						5.9	4.9	1.25	8.15	0.52	16	32.9	64.5	2.22	4.21	70.7	-	-
				6	43~62	12.3	2.21	9.9	5.98	6.97	2.60	4.2	SL	51.9	23.6	57.9	1.85	7.64	5.9	4.8	1.50	12.80	0.71	18	46.3	162.6	2.82	5.0	12.3	-	-
				7	62~	11.4	12.7	22.2	5.26	7.48	24.7	0.6	SL	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
古多糠	65	1	0~16	5.6	14.0	4.9	40.6	4.55	40.7	1.38	L	60.0	1.88	5.54	2.58	8.12	6.0	5.0	0.50	8.11	0.48	17	29.3	353.3	50.4	1.88	4.30	1,455	1.0		
		2	16~30	8.3	12.4	1.29	4.94	6.23	2.90	8.7	L	46.8	2.48	5.36	2.16	7.52	6.1	5.1	0.50	7.19	0.43	17	30.4	117.8	2.82	3.77	13.7	2,571	tr		
		3	30~40	11.3	19.4	1.28	5.14	6.42	2.9.9	5.9	L	42.0	2.83	5.34	1.83	7.17	5.9	4.8	0.75	11.57	0.60	19	49.0	120.6	1.81	4.71	8.6	2,927	0.2		

保全 対策区	土 壤 区	地 点 番 号	層 位	深 さ cm	理 学 性										化 学 性																
					風乾細 土中		細土無機物中						土 性	現地における理化学性 100CC容中					pH		置 換 酸 度 Y ₁	有機物			塩置 換 容 量 me /100g	置換性塩基 mg/100g			石 灰 飽 和 度 %	磷 酸 吸 収 係 数 mg/ 100g	有 効 態 磷 酸 mg/ 100g
					水 分 %	腐 植 %	粗 砂 %	細 砂 %	砂 合 計 %	シ ルト %	粘 土 %	容 積 重 g		固 相 容 積 CC	水 分 容 積 CC	空 気 容 積 CC	孔 隙 率 %	H ₂ O	KCl	T-C %		T-N %	C /N	CaO		MgO	K ₂ O				
川 北	ニ ウ ロ ン	65	4	40~53	10.7	82	30.3	48.5	78.8	19.5	1.7	S L	36.9	25.0	58.7	16.3	75.0	6.0	5.5	0.00	4.77	0.29	1.6	2.38	1.96	1.14	9.47	3.2	2.696	tr	
			1	0~25	6.7	16.1	2.8	4.35	4.63	3.51	18.6	C L	50.7	25.0	50.9	2.41	75.0	5.4	4.4	5.50	9.36	0.66	1.4	2.92	2.80	20.2	3.77	3.4	1.740	1.0	
			2	25~45	9.0	15.7	8.1	5.16	5.97	3.12	9.1	L	49.2	22.5	56.4	2.11	77.5	5.7	4.7	2.25	9.13	0.54	1.7	4.05	1.458	10.1	14.1	18.1	2.719	tr	
			3	45~58	11.2	15.0	23.6	4.83	7.19	2.26	5.5	S L	46.4	24.5	55.4	2.01	75.5	5.8	4.9	1.00	8.70	0.50	1.7	4.52	5.6	10.1	4.7	5.3	2.810	tr	
			4	58~75	11.7	7.4	3.77	4.67	8.44	1.56	0.0	S L	61.5	17.3	55.1	2.76	82.7	5.8	5.4	0.25	4.32	0.39	1.1	2.65	5.6	10.1	1.9	7.9	2.824	tr	
糸 櫛 別	糸 櫛 別	67	1	0~20	5.5	17.0	3.8	4.94	5.32	3.36	1.34	L	-	-	-	-	-	5.2	4.3	7.75	9.88	0.60	1.6	3.21	8.13	2.02	9.4	8.9	1.835	0.4	
			2	20~32	8.3	18.7	7.6	3.99	4.75	3.62	16.3	C L	50.9	20.5	56.1	2.34	79.5	5.5	4.5	3.25	10.83	0.65	1.7	4.15	1.374	2.82	28.3	10.4	2.553	tr	
			3	32~45	9.9	11.3	15.7	4.57	6.14	2.96	9.0	L	52.6	19.0	57.7	2.33	81.0	5.7	4.8	1.00	6.55	0.54	1.2	3.88	1.128	2.82	3.7.7	10.9	2.822	tr	
			4	45~65	10.5	10.2	14.7	4.71	6.18	2.83	9.9	L	51.6	21.3	55.7	2.30	78.7	5.9	4.9	0.75	5.94	0.55	1.1	4.47	1.851	2.42	4.71	1.47	2.842	0.2	
			5	65~86	10.3	10.0	15.6	5.77	7.33	2.24	4.3	S L	58.6	16.0	59.4	2.46	84.0	6.1	5.4	0.25	5.82	0.40	1.5	2.85	1.094	2.82	4.7	1.37	1.213	tr	
東 茶 志 骨	東 茶 志 骨	76	1	0~17	7.0	20.8	5.3	4.13	4.66	3.74	1.60	C L	6.79	8.0	5.40	3.80	9.20	5.5	4.4	4.25	1.206	0.83	1.5	8.1	1.234	40.3	3.30	5.44	1.821	0.4	
			2	17~34	8.8	12.8	15.6	3.53	5.09	3.15	1.76	C L	6.94	5.9	5.89	3.52	9.41	5.7	4.6	3.00	7.45	0.57	1.3	7.3	1.06.6	38.3	9.4	5.21	2.367	tr	
			3	34~63	10.5	-	1.99	4.88	6.87	2.42	7.1	S L	5.63	3.9	6.70	2.91	6.0	4.9	0.75	-	-	-	-	10.2	7.57	2.42	9.4	2.14	2.685	0.4	
東 茶 志 骨	標 津 原 野	78	1	0~14	6.4												5.3	4.4	5.00						1.654	7.46	4.7		1.640	0.7	
			2		8.9													5.4	4.4	4.50						2.636	6.25	4.7		2.284	0.4
			3		12.7													5.2	4.4	5.50						4.121	1.129	9.4		2.675	tr
東 茶 志 骨	標 津 原 野	70	1		6.9											4.8	4.6	18.00							3.93	2.02	1.41		1.220	3.7	
			2		2.4												4.6	3.7	21.50						1.654	38.3	4.7		1.110	1.3	
			3		9.1												5.0	4.1	12.50						1.178	1.61	1.9		1.690	tr	

伊茶仁	伊茶仁	69	1	0~9	6.3	17.9	0.9	35.5	36.4	43.2	20.4	CL	-	-	-	-	-	5.8	4.9	0.75	10.38	0.81	1.3	39.1	55.79	82.7	70.7	50.7	1,477	4.9
			2	9~35	5.2	6.5	1.5	40.5	42.0	47.2	10.6	SiL	63.7	16.0	58.3	25.7	84.0	6.0	4.7	1.50	3.77	0.36	1.0	17.4	8.41	24.2	14.1	17.4	1,703	1.5
			3	35~60	3.0	-	11.6	88.1	99.7	0.2	0.1	S	102.7	17.8	41.9	40.3	82.2	6.1	4.9	0.75	-	-	-	4.4	5.6	20.2	33.0	3.6	68.3	4.8
ウ	ウラツブ	14	1	0~14	6.1								-	-	-	-	-	6.1	4.7	1.25	4.51	0.43	1.0	23.7	31.97	32.3	10.4	48.1	1,110	3.1
			2	14~28																										
ラ	崎無異	61	1	0~11	7.3	11.3	10.5	46.7	57.2	31.7	11.1	L	69.3	15.0	54.6	30.4	85.0	5.6	4.5	5.25	6.56	0.50	1.3	28.9	42.1	18.1	14.1	5.3	2,157	0.4
			2	11~32	7.2	7.6	14.4	59.3	73.7	19.2	7.1	SL	69.3	17.0	54.2	28.8	83.0	5.6	4.5	4.50	4.43	0.37	1.2	32.3	1.96	14.1	1.88	2.2	2,257	tI
			3	32~60	5.6	-	15.6	67.5	83.1	11.1	5.8	SL	85.5	15.6	49.3	35.1	84.4	5.8	4.6	3.25	-	-	-	22.1	1.96	24.2	1.88	4.8	1,788	10.9
ブ	忠類	66	1	0~12	5.9	16.8	3.3	51.1	54.4	32.7	12.9	L	66.2	16.0	51.2	32.8	84.0	6.0	5.0	0.50	9.72	0.67	1.5	32.6	41.77	48.4	42.4	4.56	1,737	4.6
			2	12~42	8.0	15.3	8.7	51.5	60.2	31.5	8.3	L	72.0	16.0	50.1	33.9	84.0	5.9	4.8	1.25	8.90	0.58	1.5	38.0	19.35	42.3	28.3	1.82	2,517	tI
			3	42~60	9.0	9.4	14.3	59.1	73.4	22.6	4.0	SL	59.4	21.3	52.7	26.0	78.7	6.0	4.9	1.00	5.46	0.38	1.4	29.5	8.41	42.3	4.71	9.9	1,961	0.4
			4	60~72	6.3	-	14.1	66.3	40.4	16.9	2.7	SL	73.2	21.3	48.3	30.4	78.7	6.2	5.2	0.25	-	-	-	1.56	5.33	24.2	3.7	1.26	2,026	tI

町 津 標

頁	行	正	誤
2	表	へーレーキ	へーレレーキ
23	下から13行	養 分	豊 分
29	下から6行	泥 炭 地	泥 泥 炭 地
31	表	7.5 Y R	7.5 / y R
33	表	断 面 形 態	断 面 型 態
34	表	傾 斜	傾 害 斜

42 表

	PH		酸置 度換	孔 隙 率	PH		
	H ₂ O	KCl			H ₂ O	KCl	
志 東 骨 茶	5.3	4.4	5.00	志 東 骨 茶	5.3	4.4	5.00
	5.4	4.4	4.50		5.4	4.4	4.50
	5.2	4.4	5.50		5.2	4.4	5.50
原 標 野 津	4.8	4.0	18.00	原 標 野 津	4.8	4.0	18.00
	4.6	3.7	21.50		4.6	3.7	21.50
	5.0	4.1	12.50		5.0	4.1	12.50